

悲劇小説  
雪のよきう

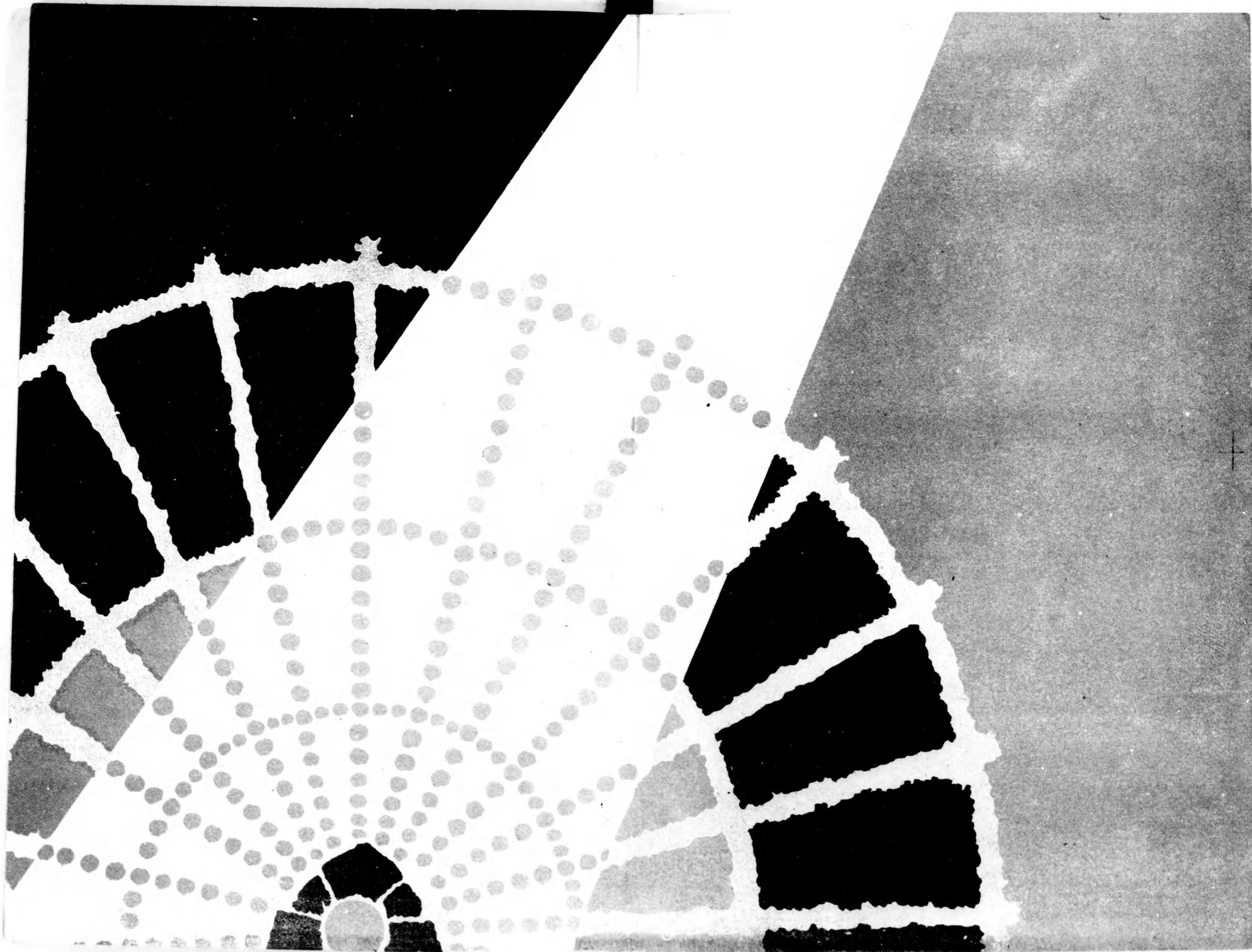
119  
190



始



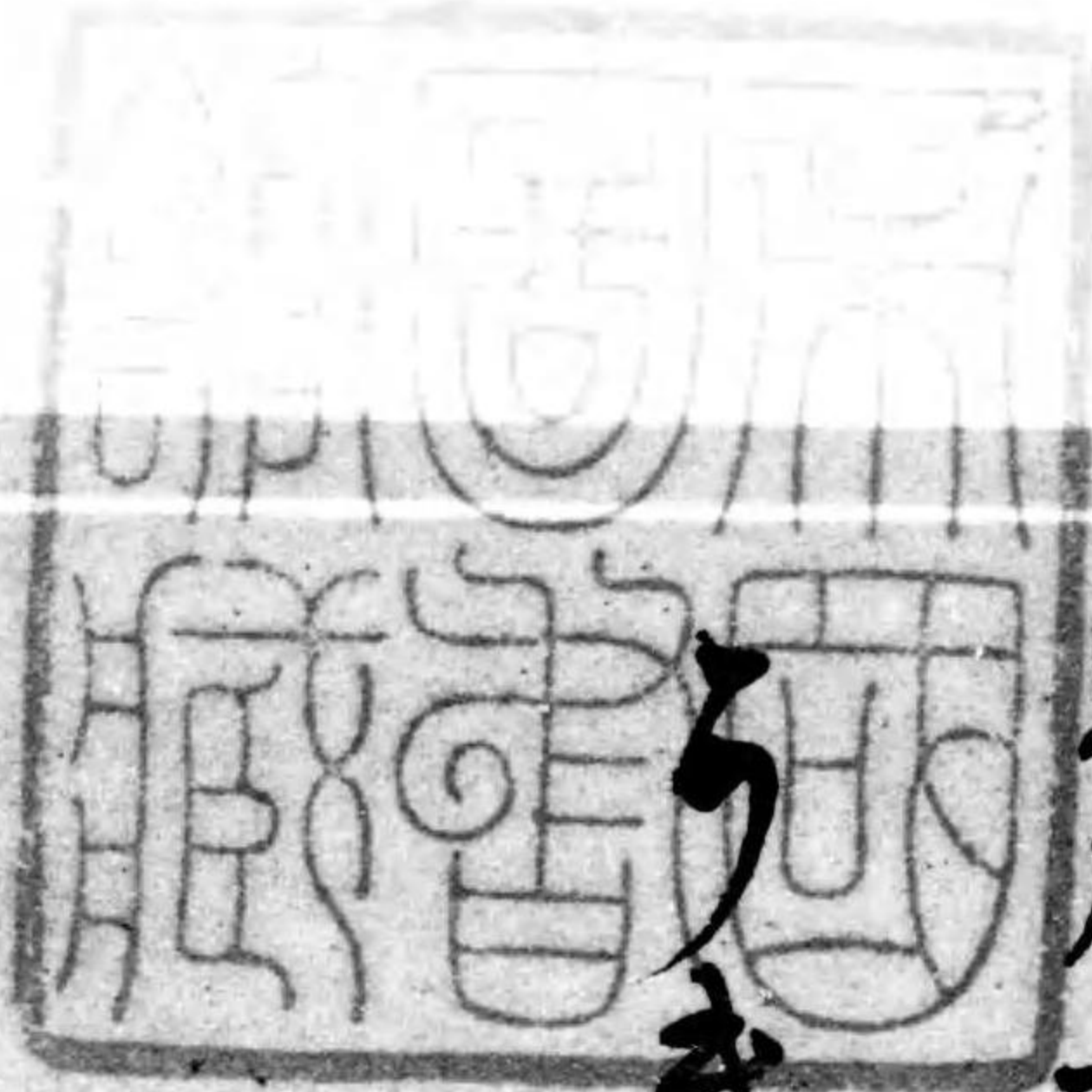






特106

438



悲劇小説

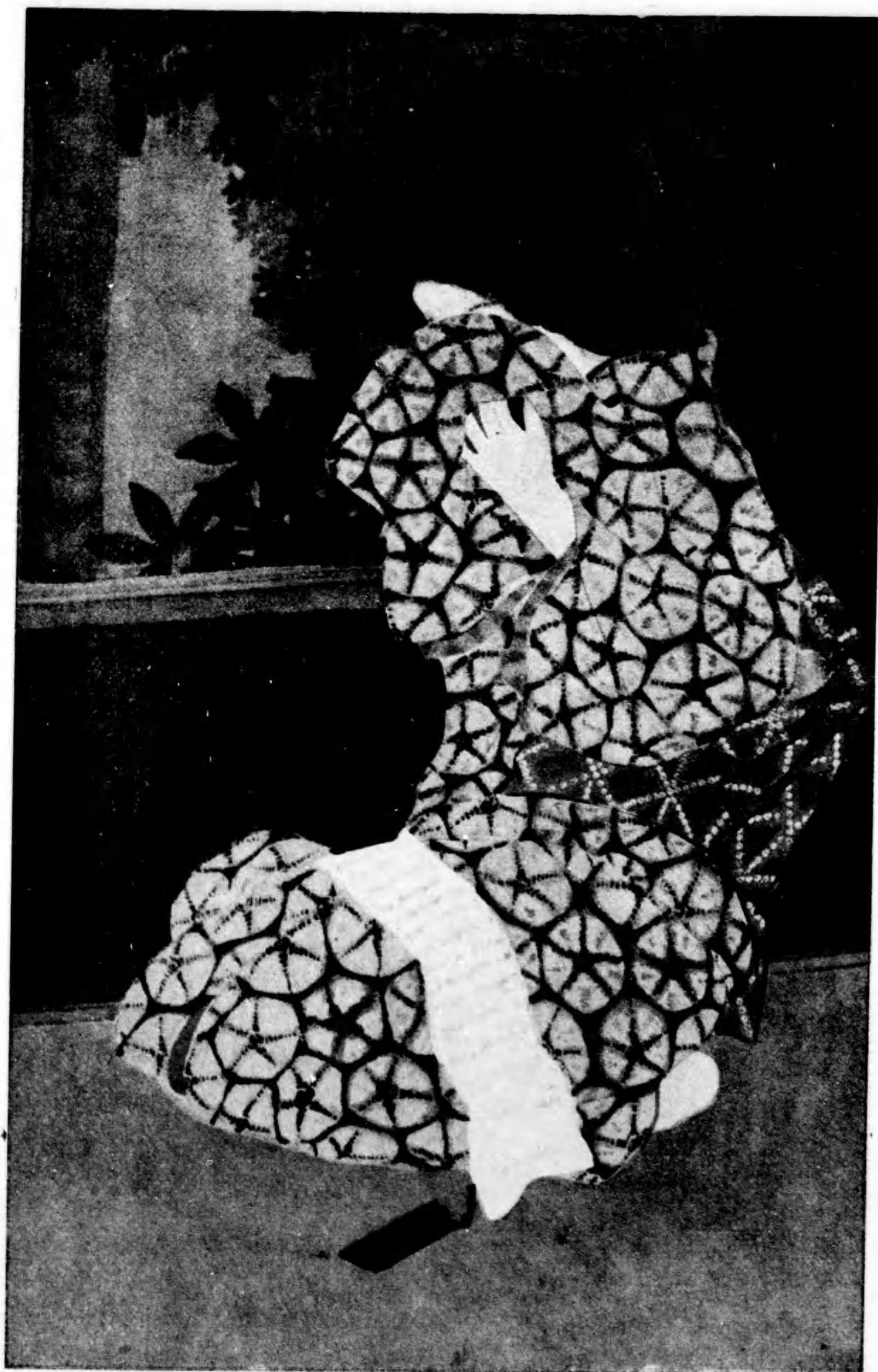
ろきよの罪

青木珠園著



大正  
8.7.18  
内交





罪のよきう





悪劇小説

うきよりの派

西伯利の花

青木 緑園 著

南滿洲一帯、西伯利の野へかけて白妙の雪の衣を脱いだのは、もう五月も半ばを過ぎてからであつた。

「内地では、もうそろそろネルの單衣でも熱いと云ふものだ。」  
斯う言ひながら、テク／＼歩いて來た一人の美しい青年の日本人があつた、時は



夕ぐれ、場所はウラジホストツクの郊外の草原道、細い小川の水が音もなく流れてゐた、何さま内地ではもう春も逝いて、初夏の日光が若葉の緑を色増して見せる頃、漸やく西伯利では春らしい気分が動いて来たと言ふものだ。

「寒い。」

ど、外套の襟を立て、首をつぼめて靴音高く地を踏んだ若い日本人の目は、彼方の闇をすかして見て異様に光つた。

「何だらう、あの物音は？」

と、耳を傾けた、何やら人の罵る聲が聞えて来るやうだ。

米國が過激派を援助してゐるとか、日本の出征軍が過激派に來襲されて苦戦したとか、その過激派の中に米國の兵士が交つてゐたとか、騒々しい取沙汰もある、言はゞ聯合國が、口先ばかりの正義人道に野心と欲望を包みかくした西伯利の宏大な野原だ、風も吹かう、雨も降らう、雪も亂れやう、然し、今、彼が訊いた叫び聲は

唯事ならぬ聲であつた。

目の前には、小川の水がのろ／＼と流れてゐた、間近な木立に風がさわぐ、浦潮の市街は赤い灯に包まれて空を明るく彩つてゐた、市街の此方に、黒雲の落ちたやうに簇り立つ林から、甲走つた女の悲鳴と、牛のやうな男の罵る聲とが、四方の静かさを破つて響いて来るのであつた。

「あの林だ。」

と、若い日本人は猶豫もなく飛んで行つた。

呼吸を殺して、ブツと暗をすかして見ると、人の倒るゝ音、彼はハツと思つて音した方へ駆け寄つた。

「勘忍して……………」

と云ふのは、疑ひもなく日本人の聲、しかも若い女の聲だ。

「何も酷い目に逢はせるのでは無い、温順しくおれの跡へついて来ればいゝのだ。」



と、これはまた意外に柔しい男の聲であつた、やはり日本人らしい。

「だつて……。」

「聲を立てるとお前のためにならないぞ。」

「あれ勘忍して。」

「黙れと云ふのに、黙らないと痛い目に逢はせるぞ。」

「あれ、勘忍して……誰か、誰か来て下さいよう……。」

木の間を洩れる星明りにすかして見ると、逞しい鬚男が、もがき苦しむ十六七歳の少女を捉へて、その手足を縛らうとしてゐるのであつた。

「コラッ。」

と、叫びながら、彼は矢庭に飛びかゝつて、暴漢の腕をつかんだ。

「何ッ。」

と、振りかへらうとしたときには若い綺麗な日本人は、暴漢を突き飛ばして少女

の前に立ちはだかつた。

「何をするのだ、怪しからん。」

「貴様こそ何をするツ。」

と、起き上つて來た暴漢は、齒を鳴らして立ちむかつた、不意の邪魔物に少からず憤怒つて、

「何だ、何者だ、邪魔をすると貴様のためにならないぞ。」

と、怒鳴つた。

二

「八釜しい、良家の少女を捉へて何を怪しからん、貴様こそ爲にならないぞ。」

「何を、生意氣な、青二才め。」

と、言ひざま、腰の邊に手をやつた。



がちやりと音がして、闇に閃めいたのは短銃の銃身、取り直すより早く邪魔立をする若い日本人の胸を狙った、引金を離すが最後、あはれ血煙立つて倒れたと思ひきや、矢庭に暴漢の手許に飛び込んだ青年の拳は、短銃の弾丸よりも早く暴漢の胸を打った。

「あッ。」

と、倒れたのは、青年ではなくて却つて暴漢であつた、短銃は彼方の木を貫いた、と、大勢の足音が聞えた。

「さ、お嬢さん、先に立つて案内しなさい、お前さんの家へ送つて行つてあげる。」

と、青年は少女を助け起した。

「……………」

言葉はなく、少女は赫と青年の手にすがつたかと思ふと、ほろ／＼と熱い涙を流した、それが言葉に現はされぬ喜びと感謝のしるしであつたかも知れ無い。

「さ、早くお立ち、愚圖々々してゐると如何なことがあるかも知れない。」  
「有り難う。」

と、漸やくにして斯う言つて立ち上つた、がその足は大地に釘付になつたやうで、少しも動かなかつた。

「しつかり爲い。」

「え。」

と、言つたが足は動かない。

「仕方が無い。」

と、青年は少女の耳に口を寄せて、

「僕が背つて行つてあげやう、いいかね、鞆固肩に攫つてね。」

「はい……………」

と言つてる間に、暴漢の仲間であらう、口々に罵りながら駆けて来る様子、青年



は少女を脊負つて、

「貴女の家は？」

「浦潮……。」

「よし、脊中で道を教へてください。」

と、言ひく、青年は疾風のやうに浦潮の町の火を望んで駆け出して行くのであつた。

「如何したく。」

「龍吉の奴、旨く引張出して来る譯だつたが……。」

と、口々に言ひながら来た二三人の黒い影、はたと倒れた男に躓いた。

「やッ、誰か倒れてゐるぞ。」

「何だか、龍吉のやうちや無いか。」

と、懐中電燈をばつと照した。

「やめ龍吉だ龍吉だ。」

「龍吉、しつかりしろ。」

と、抱き起して介抱すると、胸を打たれて一時氣を失つて倒れてゐた龍吉といふ男は、漸やく呼吸を吹きかへした。

「おい、如何したのだ。」

「如何も斯うもありやしない、飛んだ目に逢つちやつた。」  
と、胸を撫でゝゐる。

「玉は如何したのだい。」

「何處の青二才に奪られちやつた。」

「奪られた？此方の企書を知つてる奴ちや無いか。」

「どうだか分らない、とにかく後を追ひかけなくつちや。」

「何方へ行つた？」



『多分市街の方だらうと思ふ。』

『ちや、ともかくも家へ歸つたかも知れない、追ひかけて見る。』

と、ばら／＼と駈け出した。

星の光疎に、風がさら／＼と林を吹いて過ぎた、黒い影が四つ、林を出て浦潮の市街の方へ飛んで行つた。

## 三

何處かの教會で鐘が鳴つた。

往來の人も途絶えた浦潮の町を、冷たい風が吹いてゐた、家々の窓を洩る灯も見えず、何處やらで犬の吠える聲が寂しく響いて来る深夜の街を、二つの黒い影が日本人街の方へ歩いて行つた。

『もう大丈夫ですよ、此街まで来れば如何な亂暴人が來たつて大丈夫ですよ。』

『有り難う御座います、御かげ様で……。』

と、云ふ少女の聲は、感謝の涙に濕つてゐるのである。

『どんなにお家で心配してゐるか知れませんが、早く歸つて安心させてあげなくちやならない。』

『はい。』

と、溢る／＼ばかりの喜色を湛えて、少女の足取は軽く勇んでゐた、しばらくすると、少女は立ち留つて、

『此家で御座います。』

と、言はれて青年も歩みを止めた。

西洋風の、可成り立派な家であつた、商館風なのは言はずと知れた貿易商か何かであらう、表の扉は堅く鎖してあつたけれども、家内は何やら騒ついてゐるやうな人聲がして居た、戸の隙間から灯が一道の細い線を描いて地に落ちて居た。



「さ、どうぞ御上り下さいまし。」

と、言ひながら、少女は戸口の高からの石段を上つて、コト／＼と扉を叩いた、中の人の聲はひたと留つた。

「開けとくれ、開けとくれ。」

「何ッ、開けとくれつて？」

と、不審らしく訊きかへす子供の聲がした。

「わたしよ、半子よ。」

と、少女は自から名乗つた。

「あゝお嬢さんですか、ま、待つて下さい。」

と、中の子供は慌しく叫んで扉をあけた、すると、ぱつと中から灯火が射して来るのが、少女の美しくい顔を鮮やかに照した。

「あゝ、お嬢さんだ、お嬢さんだ、本当にお嬢さんだ。」

と、店員とも見える十四五の男の子が、嬉しさうに叫んだ、半子は入るなり、

「あ、萬作かい、お父様やお母様は。」

「旦那も、奥さんも、どんなに心配してゐたか知れませんか。」

と、家内を顧みて消魂しく叫んだ。

「奥さん、歸りましたよ、お歸りになりましたよ、お嬢さんが。」

「何、半子が歸つたつて……」

と、慌だしい足音がして、奥から出て来たのは四十格好の丸髻に結つた婦人であつた。

「あゝ、半ちゃん……よくまの無事で……あゝよく、よく歸つてくれました……」

「母さん……」

と、母と娘は手を取り合つて泣いたが、半子はすぐに後を振りかへつて、



「さ、貴下、どうぞ御入りなすつて下さいまし。」

と、言つたが、そこには誰もゐなかつた、たゞ風が、はたくと扉を吹いて過ぎた。

「おや、如何なすつたのだらう。」

「如何したのさ？」

「あのね、私を助けて下さつた方……。」

「おや。」

と、母親はスリツバを突掛けて、

「早く此方へ御案内申したらいゝぢや無いかね。」

「だって、其の方が被在らないんですもの。」

と、半子は泣き出しさうな聲になつた。

「まあ、如何したつて言ふの。」

「あの林の蔭で、あぶなく亂暴者に縛られるところを、助けて下さつてね、そして……わざく。」

と、少し顔を紅くして、

「私を背負つて下さつたり何かして、わざく、此處まで送つて下さつたのですよ、

その方が……。」

と、彼方此方見廻した。

四

母親も、扉の外に出て石階の上から暗い街の方を見下して、

「その方が……送つて来て下さつた方が被在らないと云ふのかね。」

「え、如何したんでせう。」

と、母と娘は眉を潜めた。



「何さま不思議なことである、浦鹽の郊外、人足途絶えた林近くをふら／＼してゐるさへ不思議なのを、若い女が危害を受けやうとしたのも不思議であれば、それを助けて折角此家まで送つて來ながら、其所で姿を隠すと云ふのも不思議な出來ごとであらねばならぬ。」

「不思議だわね。」

「本當にね。」

「その方、どんな方？この人通のない街だから訪ねさせたら分るでせう。」

「さうね、二十七八の茶色の外套を着て、同じ色の帽子を被つてね、薄い口鬚がお在なすつたわ。」

「ぢや、萬作をやつて見ませうよ。」

と、母親はそこにゐた小商店員を見て、

「萬作、御苦勞だがちよつと見て來てくれないか。」

「へい、よろしう御座います。」

「生憎誰もゐないで、お前を使つちや氣の毒だがね。」

「何、よろしう御座います、オートバイで行つて見ませう。」

と、萬作は威勢よく立ち上つた。

「母さん、誰もゐないの。」

「あゝ、お父様も先刻から半ちゃんを探しに行つて御歸りにならないしね、店の者も、みんな彼方此方、心當を探してゐるのだよ。」

「まあ、そんなに……………」

と、半子はほろ／＼と涙を流した。

萬作が、自働自轉車の用意して出かけやうと思ふと、向ふから靴音高くやつて來た二人づれの男があつた、萬作は目ばやく認めると、

「あッ、旦那がお歸りになりましたよ。」



「えッ、旦那様か。」

「何所の知らない人と一所に來るやうですよ、御覽なさいまし。」

と、言つてる間に、二人づれの男は間近く寄つて來たが、つか／＼と石階を上つて、

「半子、歸つたか。」

「お父様。」

と、駈け寄つたが、父と、連れ立つて來た焦茶の外套を着た青年を見ると、

「あゝあなた。」

「お嬢さんですか、先程は失禮。」

と、莞爾、今度は逃げも隠れもしなかつた、半子は母親を顧みて、

「母さん、此の方ですよ、あの御禮を仰有つて下さいまし。」

「此の方？」

と、母親は、不審さうに二人を見上げたり、見下したりして、

「誰方が存じませんが、いろ／＼娘がお世話になりました有り難う御座います。」

と、丁寧に頭を下げるのを、笑ひながら見てゐた父親は、

「おい／＼、誰方かちや無いよ、柳さんちや無いか、佐倉の柳さんを忘れたのかい。」

「あらまあ、此方が佐倉さんの……まあ……まあ。」

と、呆れて目を睜つた。

「とにかく此所では何だ、彼方へ御案内してゆつくり御挨拶を申上げやうぢやないか、何、ああ、知つててよ、柳さんが半子を助けて下さつたのも、御禮をくど／＼言はれるのが蒼蠅くつて、そつと逃げ出したのも、みんな知つてるよ、何さ、途中で御目にかつてね、それからまあ今夜は家へお泊め申すつもりで御案内して來たのさ。」

と、主人はひとりで呑み込んで言つた。



## 五

佐倉柳一は、英京ロンドンを出立て露西亞に渡り、擾亂の露國を見て、今、日本に歸朝の途にあつた、浦鹽から更に南滿洲の方へ渡つて、朝鮮へ出て日本へ歸る豫定であつたが、浦鹽の郊外を散歩してゐて、圖らずも半子を助けたのであつた。「實に奇遇ですな。」

と、主人は、柳一を客座敷へ引いて言つた、廣くして天井が高い、青壁を敷いて、あつさり日本風に拵へたのが、久しく日本を留守にしてゐた柳一には極めて居心地がよかつた。

主人の關屋織三郎は幼名を音藏といひ中々の才物で、浦鹽では可成手廣くやつてゐる、雜貨貿易商である、柳一の父とは學校時代の友人だと云ふことである、妻のお舟も、娘の半子も、同じ座敷へ來て夜の更けるのも知らずにゐた、酒が出てゐる、

肴も可成取り荒してしまつた、主人の關屋は、トロンとした目を据え込んで、

「實に奇遇ですな。」

と、重ねて言つた。

「本當ですよ、柳さんに半子が危い所を助けて戴くと云ふのも、まつたく御縁があればこそですわ。」

と、お舟も言つた。

「それはとにかく、一體如何したと云ふのでせう、半子さんがあんなことに御逢ひ爲すつたのは………」

と、柳一は話を外して訊いた。

「左様………」

と、關屋は妻と娘を顧みたら、半子は俯向いて顔もあげ無いでゐた、柳一は重ねて、  
「何か危害を受けるやうな心當りでもありませんか、もし、お在りでしたら、此度一



回では済むまいと思ひますがね、それに對する豫防の方法も講じなくつちや成らな  
いと思ひますが、如何したものでせう。」

「大きに左様です。」

と、關屋が首肯いて膝を進めた時に、襖の外に足音がして、

「唯今歸りました。」

と、云ふ聲がした、關屋は進めかけた膝をその儘にして、

「や、鈴木か、どうも御苦勞かけたが、半子は無事に歸つたよ。」

「左様で御座いますそうで。」

と、言ひながら入つて來たのは、二十四五歳位の若い男、顔は柔和に見えたが、  
眼が鋭く光る、ちろりと容の柳一を見上げながら其所へ座つた。

「どうも御苦勞でした。」

と、お舟も言つた。

「いゝえ、如何しまして、然し御無事で御歸宅になつて結構でした。」

「何でも、郊外の林の方で暴漢に誘拐されやうとする所を、折よく、此の方が來合  
せてな、まあ、無事で助かつたよ。」

と、關屋は機嫌よく盃をさして、

「まゝ一杯やつて呉れ。」

「有り難う御座います。」

と、鈴木はちろりと、柳一と半子を見くらべた、半子は厭な顔をして、横を向い  
て終ふのであつた、柳一は黙つて鈴木と云ふ男を見てゐた、何處か見たことのある  
やうに考へられたが、然し急には思ひ出せなかつた、さりげない顔をして床の間に  
あつた小さな鉢を見てゐた、その鉢には、白いすみれの花が咲いてゐた、半子が、  
内地から種を取り寄せたのだと云ふその白堊の花をちつと見てゐた。

「柳さん、此の男はわしの店の支配人で鈴木と云つて、若いが中々……。」



と、關谷は柳一にその支配人を紹介しやうとするのであつた。

## 日本海の波

北海汽船會社の西伯利丸が、敦賀の港へ着くのは、もう間が無かつた。

然し、それは夜のしらぐあけ、東の空に白い一道の光明が、やがてさし上る朝の晴れやかさを思はせる頃であつた、まだ夢から覺めの敦賀の港は、殘紅淡くさらさらと閃めいて、夜の餘波の灯火に守られてゐる、甲板の上に洋服姿の三つの黒い影が立つてゐた。

「とう／＼敦賀へ來ちやつたな。」

と、一人が言つた。

「上陸して終ふと機會が無くなるから、今の内に處分して終はなくつちやならないが、どうしたものだらう。」

と、他の一人も相槌を打つた。

「折角大將から頼まれたのに、手出しも出來ないと云ふのは、甚だ意氣地の無いことだが……。」

「どうも、先方も油斷が無いからね。」

「然し、あの野郎が恐ろしいよ、あの、何とか言つたかな、あの、佐倉とか云ふ青二才さ。」

「はゝゝゝ、龍吉、弱い音を吹くな。」

「然し……。」

「何が然しだよ、悪黨のやうでも無いぢや無いか、確固しろ。」

「さうだ、あんな青二才が恐がつてるやうぢや、とても金儲は出來ないせ。」



と、両方から言はれて、龍吉と呼ばれた男はいさゝか悄然氣味だつたが、

「けれど、彼奴は手が早いせ、おれが短銃を出して引金を引くか引かぬかに、彼奴の拳の方が先におれの胸を打つたのだからな。」

「何さ、少し位柔道を知つてるのだらう。そんなことに恐れておちや仕方がないや、確固しろい。」

「何だか知らねえが、おらア彼奴の眼玉は禁物だ。」

「いいや、ちや龍吉、君の手は借りないや、おれたちが行つて終ふ。」

「何も彼奴を行らなくつてもいいのだ。」

「さうは言ふが、彼奴がぬちや此方等の仕事の邪魔だ。」

「さうともく、丸で彼奴が護衛してゐるやうなものだもの、彼奴を殺してからで無くつちや、此方の仕事も手に着かないと云ふもんだ。」

「彼奴さへひなきあ、上陸してからだつて仕事は早いよ。」

と、ひそくと物語つて居る。

船は、たゞまつしぐらに敦賀の港を目がけて進んで行く、ほのくくと空が明るくなればなる程、港の灯は淡く薄くなつて行くのである。

「然し、如何いふ風にして佐倉の奴を取つ締めやうかな。」

「さればさ。」

「もう夜の明け際には港へ入るから、今の内に何とか處分しなくつちや、時機が遅れて如何にも斯うにも仕様がなくなるせ。」

「だが、彼奴、われくが狙つてると云ふことを覺りやすまいな。」

「大丈夫、分りつこありやしない。」

と、聲を潜めて物語つてゐるときに、船室から甲板へ上つて來たのが、佐倉柳一であつた、三人は急に密談をやめて、

「もう夜の明けるに間がないね。」



「さうだ、朝日の上る時分には港へ入るのだらう。」

と、わざと高聲で、さりげ無い風が装ひながらも、目は油断なく柳一の方へ注いでゐた、そんな事とは知らぬ柳一は、匂のいい葉巻を吹かしながら、甲板を彼方此方歩きながら、曉の風に吹かれてゐると、

「恐れ入りますが、煙草の火をひとつ……。」

と、三人づれの一人が近づいて来た。

## 二

自分に危害を加へるものがあらうとは、夢にも知らぬ柳一は、何の蟠りもない顔をむけながら洋服の懐袋を探つて燐寸を出した。

「さ、お使ひなさい。」

「こりや如何も恐れ入ります。」

と、件の男はさも恐縮らしくその燐寸を受け取つた。

波の面はまだ暗かつたが、空は紺青色に晴れて、星の光がだん／＼淡くなつて来た、晴れた空の果と、暗い海の果と、そこが一所になつて、一道の明るい白い線で海と空との線を描いてゐる、海上を吹く曉の風は快よく肌に泌みる、燐寸の火が、幾度も／＼風に吹き消される。

「點きませんか。」

と、柳一は顔を寄せて、風よけのやうに男の前に立つた。

「どうも風が吹くものですから。」

と、言ひながら漸やく點けて終ふと、燐寸をかへして、

「有り難う御座いました。」

「なアに。」

と、受けとつて懐中へ入れる。

「もう間もなく港へつきますな。」



「左様……。」

「これで敦賀まで何の位ありませう。」

「さあ、どの位ありますかな、二三里位ありませうか。」

「もう目の前のやうに見えますがね、そんなに有りませうかしら。」

と、男は煙草を吹きながら、だん／＼船舷の方へ歩つて行く、柳一も一緒にぶら歩いた。

「斯うして港へ近づいて行く心持は何とも言へませんね。」

と、柳一は言つて、夢見るやうな眼で港の灯を見入るのであつた、實際、少時くの間でも日本を離れた外國へ行つてゐた柳一に取つては、斯うして一刻々々、日本の港に近づいて行くと云ふことがどれ程嬉しく懐かしいものであるかは、誠に言葉の外であつた。

東がだん／＼白んで来る、海がだん／＼明るくなつて来る、空がいよいよ晴れ渡

つて来る、船舷へ立つて、柳一はちつと見つめてゐた。

「まつたくですね、ことに夜あけの海の景色は又格別ですね。」

と、言ひながら、男は柳一に近づいて来た。

ちつと、近づいて来る日本の町、日本の山を眺めて、餘念もない柳一の横顔を、ちよいと流し目に睨んだ男は、油断を見すまして背後から足をすくはうとした。

「あッ……何をやるのだ。」

と、言ひながら、柳一は横ざまにドゥツと倒れた。

「貴様がのちや邪魔になるから、海へ投げ込んで魚の餌食にしてやる。」

「何ッ。」

と、起き上らうとする所を、ばら／＼と飛んできた他の二人が、手傳つて女のやうな柳一の弱腰を突いた、何しろ、思ひもかけぬ不意のことなので、柳一は一たまりもなく海へ突き落された、水煙りがさつと立つた、甲板には折から、他には人の



影も見えなかつた、三人の男は顔を見合せてにやりと笑つた。

「おい、案外脆かつたな。」

「はゝゝゝ、人の戀路の邪魔する奴は、犬に食はれて死んぢまへつてあ、魚の餌食になりや大した出世だ。」

「はゝゝゝ。」

と、言ひながら船室の方へ降りて行つた。

船は、斯うした出来ごとのあつたとも知らずに、港をさして進んで行く。

## 三

「おや、柳さんは此所にも見えませんよ。」

と、言ひながら半子が船室から上つて来た、そのあとから、父の關屋と、母のお舟も續いて上つて来た。

「如何したのだらう、他に人のゐるやうな所は無いが……。」

「本當に如何したのでせうね。」

と、關屋もお舟も不審の眉を潜めた。

その内に、夜がしらくと明け渡つて、紅く大きな太陽が、東の方から悠々として上つて来た、海は一面に真紅の波を漂はせて、間近になつて日本の山も町も、一様に紅く飾られた、客はみんな甲板へ上つて来て、此の海上の日出を拜んだけれども、然し、その中に佐倉柳一の姿ばかりは見えなかつた。

「如何なすつたのでせう。」

と、云ふ半子の眼には不安の色が漂つてゐた、關屋もお舟も、思は同じく、柳一の行衛を案じた。

柳一が日本へ歸ると云ふので、關屋一家も急に生れ故郷の東京が懐しくなつた、それに半子が危難にあつたことなども考へると、急に浦鹽に娘を置くのが不安になつたので、半子を東京の祖母の家へ預けるつもりで、柳一と同道して浦鹽發の汽船



に乗つて、敦賀の港へ来ることになつたのである、半子を東京へ預けてをけば、夫婦は又浦鹽へ歸るのは勿論のこと、店は支配人の鈴木傳次郎に任せて来たのであつた。

船が、今や日本の港へ着かうと云ふときになつて、不意に柳一の姿が見えなくなつたのは、實に不思議千萬なことである、彼方此方探したけれども、柳一の行方は皆くれ分らなかつた、船中は大騒ぎになつた、船長も、事務長も、他の船客たちも、それ〴〵心配したが、柳一の行方の分る筈は無かつた。

『どうも奇怪い。』

と、關屋は首を傾けた。

『本當に奇怪しう御座んすわね、あの方がまさか投身を爲る譯でも有りますまいしね、ちつとも、當がつきませんわね。』  
と、妻のお舟も言ふのである。

物は言はなかつたが、半子は心配さうに始終胸をおさへてゐた、時々、思ひ出したやうに顔をかくしたのは、その涙を隠すためであつたかも知れない。

『然し、若しと云ふことがありますから。』

と、船長は、もしや投身でもしたのでは無いかしらと、ボートを下して其處邊を探させたが、人間の死骸らしいものも見當らなかつた、その内に、船は敦賀へ着いた。

乗客は何れも先を争つて波止場を上つた、關屋親子は、嬉し喜んで歸つて来た日本の土地を踏むのも、今は却つて物憂く感じられるのであつた、もしや、この乗客の中から、ひよつくり姿を現すこともあらうかと、頼みにならぬことをも頼みにして、一人々々の乗客を見てゐたが、柳一の姿は遂に見出すことは出来なかつた。

『どうしたのだらう。』



と、關屋は、今更の如くため息と共に言った。

空は晴れて、朝風の海は風も靜かに波をゆすつてゐたが、關屋夫婦の心は曇つてゐた、半子の胸には波風が荒く立つてゐた、悄然として船を出た親子三人の姿を見て、小氣味よさげの皮肉な微笑を浮べてゐた逞ましい三人づれの男がゐたことを、關屋も、お舟も、半子も、ちつとも氣が付かなかつた。

## 月に立つ影

東京の市外、澁谷の町外れに佐倉柳一の歸朝を待つてゐる母子の家があつた、立派と云ふ程ではなかつたけれども、瀟洒なひと構、廣からねども庭もある、八疊の茶の室では十七八の娘がせつせと何か縫物をしてゐる傍に、母親らしい四十七八の切髪の、品のよい婦人が小説本に讀み耽つてゐた。

「君ちゃん、もう何時になるかね。」

と、母親らしいのは讀みさし的小説本を閉ぢて言った、君代はちよつと茶筆筒の上の目覺時計を見て、

「もう十時半ですよ。」

「さうかねえ、餘り小説に身が入つてちつとも氣が付かなかつたが、お前もう、衣が出来上がるの？」

「ええ、出来上りましたの。」

と、言ひ、合邦の貞女のやうな君代は情けの縫目を細かに運んでゐた手を留めて、思ひの針を襟にさして、

「是非とも今夜中に仕あげやうと思つたものですから、一生懸命に……。」

「どれお見せ。」

と、そばへ引き寄せたのは夏羽織、黒い絹の五つ紋付、とかく打ちかへして見て



莞と笑つて、

『大變よく出来たよ。』

『不可ませんよ、下手ですよ。』

『柳一が着たら、よく似合ふだらうね、早く、此の着物を着せて見たいね。』

『でも、お氣に召すでせうか。』

と、言葉の尻は口に消えて、疊の目を數へてゐたが、ふと顔をあげると母の眼がちつと見つめてゐるので、慌てゝ又外して終ふ。

『あの單衣と重ねて御覽な。』

と、言はれて、首肯して立ち上つた、先に縫つたセルの單衣と、この羽織とを重ねて、袖だけを合せて衣紋竹にかけた。

『いいね。』

と、母は莞と笑つた。

『兄さまは長年外國に入來つたので、洋服ばかり召してらしたのですから、お似合ひなさるかどうかと、折角心配してますの。』

『そりやお前、似合ふともね、柳一はほつそりしてるから。』

『まつたくですわね、ほつそりした方は、何を御召しになつても似合ひますわね。』

『それにお前の手際だもの。』

『わたしの手際なんか駄目ですよ、わたしが下手ですから、折角兄さまの御身體は何でも……。』

『そんな事はないよ。』

『だつて……。』

と、君代は頬を染めて羞恥かしげに俯向いた、母親はその横顔をうれしげに覗き込んで、



「大分風が出たやうだが、雨はもう止だのかね。」

「先刻御手水に参りましたときに見ましたら、すっかり晴れて、もう御星様が出ておりましたよ。」

「さうかね、そりやい、按配だね。」

「四五日降らせたくないものですわね。」

「さうだね、せめて柳一が東京へ歸つて来るまでね。」

「もう何の位お入来なすつたでせう、たしか浦鹽から汽船で御歸りになる御都合のやうな御手紙でしたわね。」

「さうだつてさ、何なら船のつく所へ迎えに行つてやりたいけれども、横濱でないんだから遠くつて駄目だね。」

「本當に左様ですわね。」

「何にしても待ち遠しいよ。」

と、母と娘は、五六年ぶりで日本へ歸る柳一の噂をして、夜の更けるのも知らないでゐた。

## 二

更けて行く夜の、風は流石に初夏とは言ひながら冷たかつた、窓をあけると、若葉に露の光、鎌のやうな細い月が夜を守り顔にさしてゐた。

「お前が丸鬚に結つたら、どんなにか綺麗になるだらうね。」

と、母親は又しても、思ひ出したやうに君代の顔を覗きながら言ふ、言はれてすぐに紅くなつて、

「厭な母さま、わたし、ちつとも綺麗になんぞ成りはしませんわ。」

「丸鬚に結ふのが厭かい。」

「その厭とは異ふのよ。」

「だつてさ、柳一が歸つて来て、お前が丸鬚に結つた姿をちつとも早く見たいんだ



もの。』

『そりや、わたしだつて……。』

『お前だつて、そりや早くね、一日だつて早い方がね、そうだらう、ほ……。』

と、羞恥む君代の顔を可愛らしやと覗き込むのである、君代は膝の上で手をもちもぢ目の遣場に困つたやう。

『母さんつてば、玩弄つてばかりゐらつしやるんですもの。』

『玩弄ふものか、本當に心から左様思つてるのぢやないか、早く二人並べて見たいね、そして早く初孫の顔が見たい……。』

『ほ……。』

と、紅くなつて笑つてゐる、母様は氣が早いわねと言ふ心を目で見せた。

『老人は先がないから氣が短くつてね、ああ、じれつたい、何だつてまあ柳一は斯う遅いんだらうね。』

『母さんつてば……。』

『何だかわたしは氣になつて仕方がない、本當に早く歸ればいいのに……。』

『兄さまだつて、そりやお早くお歸りなさりたいに決つてますよ、でも、長い道中ですもの、船や汽車の都合で思ふやうには行きませんわ、東京に被在つてちよいと外へお出かけになつたやうな都合には参りませんもの。』

『だつてさ、焦つたいぢやないか、汽車だの汽船だのつて、ちつとも早くはないんだね。』

『ほ……。』

『笑ひごとぢや無いよ、お前だつて待ち遠しくないことは無いだらう。』

『そりやもう、わたしだつて如何なお待ち申してゐるか知れませんか。』

『啼かぬ螢が身をこがすつて、唄の文句にもあるから、何にも言はないお前の方が餘計待ち懸れてゐるかも知れないね。』



「ええ……。」

と、口の内で言つて、目で首肯したのを、ちつと、眺めて母親は、

「何方に似ても可愛いわね。」

「え？」

と、不審さうに眉をあげた、餘り唐突の言葉に驚いたのである。

「何さ、子供のことさ、お前と柳一の間に子供が出来たら、何方に似るだらうね。」

「わたしには似ない方がいいのですよ。」

「そんなことはありやしない、女ならお前に似た方がいい、一姫二太郎と云ふから、初は女の方がいいね、え、お前どつちがいいかね。」

「だつて、まだ分りやしませんわ、もし、兄様が御氣に召さなければ……。」

と、顔を襟に埋めて、ほつと溜息をついたのであつた、母か初孫の顔が見たいなどと先走りをした考へごとをしてゐれば、これはまた男に氣に入るか入らぬかと取り

越し苦勞をしてゐる。

「氣に入るも入らないもあるもんかね、もとく柳一と夫婦にするつもりで、わたしが引きとつて育てたお前だもの。」

「お母さんはそのお心組でも、兄様が何と仰有るか分りませんわ。」

三

「柳一だつてその心組でゐるのぢやないかね、今更そんな取り越し苦勞をするものがあるかね。」

「だつて……四年も五年も御目にかゝらないんですもの……それに浦鹽で關屋さんとか仰有る方の……。」

「關屋さんが如何したのさ、あれは死亡つたお父様のお友だちで、不意に浦鹽でお目にかゝつて一緒に歸ると云ふまでのことぢやないかね。」

「お嬢さんが大層お美しくいそうですから……。」



「ほゝゝゝ、まあ呆れた。」

と、母親はわざと大仰に笑つて、

「そんな餘計な心配をするものがあるかね。關屋のお嬢さんがどんなに美しくいつて言つたつて、何もお前、それが柳一と如何斯うと云ふ譯のものぢやないわね。」

「でも、そんな意味の御手紙でしたもの。」

「御手紙? どんなん?」

「そのお嬢様も一緒に日本へ御歸りなさるんですつて。」

「一緒にかへつたつていいぢや無いか。」

「だつて、私なぞ教育もないし、親類もないし、それにこんな不景色なのですもの、關屋さんの御嬢様のやうなお美くしい方を御覧になつたあとでは、どんなにか見すばらしく見えるでせう。」

「まあ、此の子は詰らない心配をしてゐるぢやないか、そりやね、なる程、關屋の

御嬢様は御綺麗だらうさ、親御も財産はお在なさるだらうさ、けれども……。」

「知つてますわ、わたしは……。」

「何を?」

「關屋さんは御嬢様と兄さまを御夫婦になさる御心組なのですもの、わたし、あの御手紙を拜見したのですもの。」

と、君代は、五六日前に浦鹽から寄越した柳一の手紙のことを言ひ出した、なるほど、その手紙には關屋が半子を柳一に婚はせたいがどうだと云ふやうな話のあつたことが書いてあつた、それと同時に、柳一の母親に關屋からよこした手紙にもそのことが書いてあつた。

「馬鹿だねえ、此の娘は。」

と、母親は笑ひ顔、何を餘計な心配をするのだと言はぬばかりに目で睨むやうにして、



「あの手紙を読んだら、尙更柳一の心も分りさうなものだね。」

「どうせわたしは馬鹿ですもの、兄様の御氣に入らないのは知つてますけれども、でも折角こんなに御待ち申してゐて……詰らないわ。」

「誰が氣に入らないと言つたよ。」

「言ひはしませんけれども、御氣に召さないのは分つてますよ。」

「馬鹿だねえ、自分で氣に入らないつて決めて、ひとりでよくくしてゐるものがあるかね、お前この頭馬鹿に沈んでると思つたら、その事を心配してゐるのだね。」

「……」

「ほら、此の手紙をもつとよく御覽。」

と、母親は立ち上つて茶籠筒の曳出から一通の手紙を出して来て、君代の目の前に横げて、

「何と書いてあるかよく御覽な。」

と、言はれて君代はなつかしげに許嫁の良人の筆のあとへ黙々として美しくい  
 眸を落して行つた。

「ね、よく読んで御覽、關屋さんから半子さんを如何だと云ふ話があるのだが、話に  
 するほどのことでもないから返事もしないで置いたつて、ね、左様あるだらう。」

「ええ、でも……どうして御返事を爲らないのでせう。」

「決つてゐるぢや無いか、お前と云ふものがあるからさ。」

と、母親は笑ひながら言つた。

四

君代は紅くなつて笑ひながら、燃えるやうな眸を母親にむけて、

「いゝえね、左様申しちや濟みませんけれども……どうしてきつぱり御断りなさ  
 らないのでせう。」

「ほゝ、それでお前心配してゐたのだね、まさかお前、その場で断るつてことも



出来まいぢやないかね。」

「左様でせうかねえ。」

と、君代は溜息をついた。

「きつぱり断らないから、柳一の心が分らないつて、左様思つてゐるのだらう、そんなことは本當に取越苦勞だよ、御覽な、此處にもあるけれども、問題にするほどのことではないからなのさ。」

「左様で御座いませうか。」

「大丈夫、心配しなくもいよいよ、もし柳一が松よし小町の半子さんと如何とか言ふやうだつたら、母さんが承知しやしないから、安心してをいで、都新聞の中里さんが添はせると云ふのだから大丈夫だらう、え、君や、そうぢや無いかい。」

「え……。」

と、僅かに口の内で言つた、しかし、その美しい眼は感謝の涙に濡れてゐた。

「外見もないよ、涙なんぞ流してさ。」

「わたし、嬉しくつて、母さんの御情が勿體なくつて……。」

と、しくしくと泣き出した、母親も思はずほろりとして、

「母さんだつてお前、折角お前をこれ迄大きくしたのだから、今更、他の氣心の知れない御嬢様を誰が柳一のお嫁にするものかね。」

「本當に母さんには御世話になつて……。」

「そのかはり、これからお前の御世話になりますよ、わが儘の仕放題をしてお前に厄介かけますよ。」

「どんなお世話だつて、わたしや、命にかけても御孝行しますわ。」

「嬉しいことを言つてくれるわね、そのつもりで寢床を敷いて貰ひませうかね。」

「濟みません、つい放心してゐて……もう十一時ですよ。」

「左様なるかね。」



と、立ち上つて椽側へ出たが、何に驚いたか消魂ましい聲をあげた。

「あれッ、君や。」

「如何かなすつて？」

と、君代も慌だしく言つて椽へ出た。

「御覽よ、誰かぬるぢやないかね。」

「さうね。」

二人とも、呼吸を殺して庭を見た、黒い板塀の、裏木戸に近く立つてゐる柳の蔭に、月光に背いた人の影が見えた。

「誰方？」

と、母親が聲をかけると、月に立つ影は、ぱつたり消えてしまつた、唯風の音、星の瞬き、人らしい姿は何處にも見えなかつたのである。君代は寄り添うて、

「何でせうね。」

「さあ、何だか分らないが、どうも奇怪なことがあるものだね。」

と、母親は肩をすぼめて、身慄ひをするやうな態度を見せた。

「何か通りがりの人でせう。」

「左様かも知れない、とにかく遅いから、もう寝やうぢやないか。」

と、さりげ無い顔を見合せたが、二人の心には何かしら不安の念が付き纏つてゐた、お互に心配させまいと思つて、口に出しては言はなかつたけれども、心々の亂れ髪、胸を痛めながら座敷へ戻るのであつた。

### 五

若葉の梢を、さら／＼と風が鳴らすのも、もしや先刻の怪しい人の影では無いかと、母親は自から立つて戸障子を締めるのであつた。

「母さん。」

と、君代は寄り添うて恐ろしげに言ふ。



「え？」

「何だか不思議ね。」

と、小聲になる、母親も恐ろしげに首を縮めて、

「今の人がい。」

「え、御門は締めてあるのでせう、それなのに柳の下に立つてゐるつて、變ぢやありませんか……。」

「まさか、柳の下だからつて、今の世の中に幽霊でもあるまい、心配しないがいいよ、氣のせいだあね。」

と、母親はこともなげに言つてのける。

「氣のせいではせうかしら、でも、あの顔がはつきり目に見えるやうですよ。」

「あ、停めておくれ、やめて……。」

と、手を振つて言ひ消したが、恐ろしさに堪えぬやうに、座敷のうちそと彼方此

方見廻して、

「さう言へば、あの暗いところに立つてゐるのに、衣服や御袴の縞まで確實見えたわね。」

「羽織の御紋もねえ。」

「あッ。」

と、母親は氣弱くそこに突伏した。

「母さん、如何かなすつて。」

「どうもしないけれど、何だか今夜は氣味が悪い……。」

「本當に厭な晩ですわね。」

と、氣味悪さうな顔を見合せたときに、裏木戸をコトコトと叩く音がした、二人はハツとしたやうに耳を欬立てた。

「誰か来たのでせうか。」



「さうね、何だかコト／＼門を叩いてるやうだが……。」

と、言ひ合せた儘で二人は聲を潜め、呼吸を殺して聞耳を立てゝゐた。  
「風だよ。」

と、しばらくして母親が言つた。

「……でせうか？」

その内に門を叩くやうな音はやんだ、君代は安心したやうに、

「やつぱり風でしたわね、誰か来たのなら何とか聲を掛けそうなものですのに、何とも言はない所を見ると風だつたのですわね」

「だが、今夜は厭な晩だねえ、母さんは何だか悪い兆があるんぢや無いかしらと、氣になつて仕方がない……。」

「悪い兆？」

「今日は朝つから柳一のことか心配だつたが、異状が無くつて呉れ、ばいいがね

え。」

「大丈夫ですよ母さん。」

「乗つてる船に何か故障でもありやしないかね。」

「そんなこと有りませんわ。」

「もしか、汽車で間違ひでもあつたのぢや無いかしら。」

「それこそ母様の仰有つたやうに取越苦勞ですよ。」

「何にしても歸ると決つてるものが歸つてしまは無いと、心配でならない。」

と、眉を潜めて言つたが、急に氣を變えたやうに、

「ああもう遅い、お前もう寢やうちや無いか。」

「え、左様ませう。」

と、君代は温順しく首肯して立ち上つた、外には青葉若葉をゆるする風の音、風につれて、ぱら／＼と落ちる露時雨、二人は顔を見合せながら耳を敬てた。



## 渡鳥の悲哀

雀がらりと軒端に訪れると、植込みの若葉に朝日が水々しい色を添えて見せる、さら／＼と梢を鳴らして吹く風も匂やかな朝であつた、あれやこれやと思ひ寝の夢を結びかねて、一夜まんぢりともしないで明した君代は、はやくと訪れて来た婦人の客に驚かされた。

「御免下さいまし、此方は柳さん……佐倉さんの御宅で御座いますか。」

と、云ふ聲も忙しない、呼吸を亢ませてゐる、客は三十を五つ六つ越したらしい年配の婦人であつた。

「は。」

と、ばかり、見馴れぬ此の客を不審さうに見上げた。

「佐倉さんの御宅で御座いますか。」

「は、左様で御座いますよ、失禮ですが誰方様で被在やいますか……あの、主人は唯今洋行中で留守で御座いますけれども。」

と、ちよつと息を引いて、

「もつとも二三日のうちに歸ります都合にはなつてゐますが……。」

「ああ……。」

と、不思議な女客は、ほろりと涙を落して、

「さぞ、御待ちなすつてらつしやいますでせうね、ああ、さぞ……。」

「はい。」

「あの、御母様は御入來で御座いますかしら。」

と、手早く涙をぬぐつて、ちろ／＼と君代の姿を見上げたり見下したり。

「はい、あの、まだ御寝みなすつてますが、貴女様は誰方様で……。」



「私は、柳さんと浦鹽で御懇意にした關屋の家内で御座いますが……。」

「あ、あの貴女が關屋さんの奥様で……？あ、左様で御座いますか、どうぞ御上り下さいまし。」

「は……。」

と、ばかり、躊躇してゐる。

「どうぞ、あの御上りくださいまし、本當に汚ない所で御恥かしう御座いますか、さ、どうぞ。」

「はい、有り難う御座います。」

「さ、どうぞ。」

と、先に立つて導きながら、君代は少し顔を紅くして、口籠りながら、

「あの、何は……主人は貴女方と御一緒に浦鹽を出立たやうに承はりましたが……如何いふ都合なのでせうか。」

「さあ、その事ですがね。」

と、言つた儘、お舟はちつと此の美くしい娘の顔を見た。

「何かの都合で遅れましたので御座いませうが。」

「その事です。」

と、答へ惱むのを、君代は怪しく思ひながら、強いて言葉を重ねる譯にも行ないで黙つてしまつた。

この奥さんの娘を、わが許嫁の良人の柳一に婚せやうとするのであらう、その故に、自分を見て、とかく返事を出し澁るのであらうなどと、娘氣の、悲しいとに推し察りもする。

「さうどうぞ御敷き下さいまし、唯今母に左様申して参りますから。」

と、君代はお舟を座敷へ通して、座蒲團を勧めながら言つた。

「は、どうぞ御構ひ下さらないで……。」



と、もぢくしてゐるが、母に左様申して参りますと云ふ君代の顔を見て、はつとしたやうに眉を曇らせるのであつた。

「母に？母にといふと、あの娘さんは柳さんの妹かしら、はつきり兄さんと言ひさうなものだが……。」

二

妹があるといふ話は訊かなかつたから、初めは女中かと思つたけれども、女中にしては綺麗過ぎる、それに、母と云ふ譯はない。

「もしや彼女が柳さんの……。」

嫁かしらと、思はず口に出して呟やいたときに、君代がお茶を煎れて持つて来てくれた。

「恐れ入ります。」

と、言ひながら、お舟はしみくと君代の顔を見た。

「つかぬことを御訊き申すやうですが、貴女は柳さんのお妹さんで被在いますか。」

「は……い……え……。」

と、君代はあるか無きかの聲で答へた。

「どんなにか御兄様の御歸朝を御待ちなすつてらつしやつたでせうね。」

「はい。」

「お母様もねえ、さぞかし……。」

と、言ひながら、流に曇るその聲を君代は訝かしいと思つた、その時庭に面した椽を、衣すれの音と共に、

「君や、お客様は何方？」

と、云ふ母親の聲がした。

「はい、此方で御座いますよ。」



と、君代は、ちよつとお舟に會釋をして立つと、入れちがひに母親が、その切の品のいい姿をゆつたりと運んで来た、悴の消息を訊きたさに、飛立つ胸のおもひはさりげなく抑へて、静かに手をついて、

「被在いまし、私が柳一の母親で御座います……。」

「初めまして、私、關屋の家内で御座います。」

そんな口上が二女の間にとり交された、亡き柳一の父親と、關屋とは友達の間柄であつても、この二女が顔を合せるのは今日が初めてであつた。

「何ですか、柳一がいろ／＼御世話になりましたさうで……。」

「いえ、手前こそいろ／＼御厄介かけたので御座いますよ。」

と、お舟は今更覺悟して来たことながら、すぐには用事を言ひ出し兼ねないで、ただ膝の上で手を弄つてゐた。

「貴女方と御一緒の船で歸るやうに申して来ましたが……。」

「はい、その都合で御座いましたが。」

と、お舟は額を拭つた。

「……? では、あの、何かの都合で遅れましたのでせうか。」

「その事で御座いますが……。」

と、言ひ苦さうに、又しても手を弄つてゐる、顔には困憊の色があり／＼と現はれてゐた、一緒の船で来ましたが、途中で行方が不明になりました……と待ち切つてゐるこの母親に如何して言はれやう、長い年月の間、まつて待ちぬいたこの母親に、そのいとし子は行方が知れない……と、如何して言はれやう。

「何か、病氣にでもなつたのでは御座いますまいか。」

と、心配さうに眉を潜めた。

「御病氣では御座いませんが……。」

「御一緒では無かつたので御座いますね。」



「一緒に被來やる御都合だったのですけれども……。」  
 「では……。」

「そのお話について、實は昨夜主人が伺ひました筈ですが、何とも御聞きにはならないのでせうか。」

と、お舟はほつとして言つた。

「御主人？、あの關屋さんが？」

「はい、左様で御座いますよ。柳さんは私どもと御一緒に被來る御都合だったのですけれども、それが御一緒出来なかつた譯を……。」

と、お舟は漸やく言つた。

## 三

仔細ありげな言葉の始終に、柳一の母親のおりうは、何かしらす胸をひやりとさ

せられたのである。

「どう云ふ譯で御一緒に來られなかつたのでせう。」

「それを、主人が御話する筈で伺がつたのですが……。」

「御主人は御見えになりませんでしたよ。」

「えッ？」

と、お舟は「こんどはお舟の方で吃驚させられたのである。」

「ねえ君や、關屋さんは御見えにならなかつたねえ。」

と、次の室にゐる君代に聲をかけた。

「え、昨日は誰方も御見えになりませんでしたよ。」

と、君代は、心にかゝる柳一の身の上に、胸を轟かしながら答へた。

「あの、主人は參らなかつたでせうか？」

と、お舟の方で心もとなげに言ひ出した。



「御見えになりませんでしたよ。」

「左様ですかねえ、もつとも、主人も行き悪い、行き悪いと申してゐたのですけれども、伺がはない譯には行きませんしねえ、昨夜遅くなつてから……」

「昨夜遅く？」

「え、何でももう十時過ぎでしたかねえ、話し悪いが、お話しなない譯には行かないから、どうしても行つて来ると申しましてねえ、ですから、わたしはもう御話はあつたものと思つて居りましたのですが……」

「でも、奇怪う御座んすわね、お歸りになつて貴女方に何とも御話はなかつたので御座いますか。」

「それが、昨夜出た儘まだ歸らないので御座いますよ。」

「御歸りにならない？」

「はい、けれども………何分久しぶりて日本へ歸つたことでもありますから、何處

他へ廻つてゐるのか知れませんが、でも、御宅へはねえ、御宅へはどうしても伺がはなければならぬのですが……」

「何か柳一に間ちがひでもあつたので御座いませうか。」

と、おりうの眼は不安に曇つて来た。

次の室で洩れ聞く君代は、立つたり座つたり、過敏にその神経を働かせてゐた、昨夜のことなども思ひ出されて、何か悪いことの前兆ではないかと言つた母の言葉が、槍の穂先で胸を貫ぬくやうに考へ浮んだ、行き悪い、話し悪いと云ふお舟の言葉も、何か不吉なことだからなのでは無いかと、思ひ迷はずにはゐられ無いのであつた。

「左様しますと柳一は？……」

と、おりうは、お舟の返事がその身にも心にも、恐ろしい驚愕を及ぼすべきことを心のうちには危み怖れながらも、訊かない譯には行かなかつた、恐ろしいものに



觸るやうな心持ちで、ひやくしながらお舟の返事を待ちうけてゐた。

「柳さんは……。」

「……………」

物は言はず、おりうは呼吸を飲んだ、君代は胸をおさへて愕然として耳を欬だてるのであつた。

「柳さんは……何とも御氣の毒なことをいたしました。」

と、言ふか言はぬかに、君代がわツと悲しい哭音をあげた。

「君やどうしました。」

と、立ち上つたおりうの目の前へ、お舟は一枚の新聞紙を投げ出すやうに置いて、物も言はず、挨拶もせず、慌てたやうに外へ出てしまつた。

## 四

左様したお舟の態度を、怪しいと思ふ間もなく、おりうは新聞を手についた儘、あたふたと茶の室へ來た。

「君や、如何したのです。」

「母さん、如何したらいいでせう。」

と、君代はそこへ泣き伏した儘、顔もあげられなかつた。

「どうしたらいいと云つて……關屋の奥さんも奇怪な人ぢやないかね、挨拶もしないで行つてしまふなんて……………」

「母さん……………兄さまに何か御間ちがひかあつたのぢや無いでせうか。」

「あッ、左様だ……………」

「話し悪いの、お氣の毒だの言つて、逃げるやうに御歸りになつて、本當に如何し



たと云ふのでせう。』

『本當に……何か間ちがひが有つたのだらうかねえ。』

『母さん、その新聞は如何なすつたの。』

『今、あの奥様が置いて行つただけでも……。』

『何か書いてあるのちや無いでせうか。』

『さあね、あれ、何だか見馴れない新聞だねえ。』

『どこか田舎の新聞ですよ、これが如何したつて言ふのでせう。』

『見ろつて言ふ譯ちや無いかねえ。』

『さあ、左様かも知れませんか。』

と、何心なく新聞を擴げて見た、それは大阪の方で發行してゐる小新聞で、二人の眼は忙しく三面記事の上に見たことも聞いたことも無い新聞であつた、二人の眼は忙しく三面記事の上を動いて行つた。

『ああ……母さん……。』

と、君代は急に聲をあげた。

『え、何かあつたのかい。』

と、目をむける。

『ああ……母さん……。』

と、君代は囁話のやうに言ひ續けながら新聞の上に涙を落した。

『何、どうしたの？』

『あ、如何しませう、如何しませう。』

と、言つて、君代は身もたえしながら新聞の上に顔をつけて泣いた。

『どうしたの、どうしたの。』

『母さん、如何しませう。』

『仔細を仰有い、仔細を。』



「言はれやしませんわ。」

と、ばかり、わつと聲を立て泣くのであつた。

「仕方がないわね。」

「大變です、大變です、兄様が、そりや大變なものです。」

と、新聞をそこへ擴げて、慄えおのゝくに手に指さし示すと、おりうも老たる眼をオド／＼と君代のしなやかな指の動くのを追つた。

「まあ、柳一が、まあ……………」

と、餘りの意外に涙も乾いたが、睜つた眼は驚愕と困憊と、失望と落膽とのさまざまのいろを浮べて、しばらくは聲も續けられなかつた。

「君や……………」

「母さん、如何しませう、如何しませう。」

と、留めても留まらぬ涙の露、母親の膝に顔をふせて泣いた。

その新聞には、英國から歸つた佐倉柳一が、浦鹽を出た汽船に乗つて日本へむけて歸朝の際、行方不明になつたと云ふことが、大きな活字で書き記してあつた。

「大變なことになつた。」

と、おりうは、わが膝に泣き伏してゐる君代の肩に手をかけて、しばらくは爲すべき仕事も手には付かなかつた。

五月の空は、麗らかに晴れてゐて、吹く風さへも清々しかつたけれども、二人の胸の曇り、心の悩み……………」

## 五

佐倉柳一が、英京ロンドンへ留學の途に上つたのは、今から丁度五年前の春であつた、そのとき君代は祝田女學校の二年生になつたばかり、下髪にリボンを結んだ愛くるしい少女であつた。



五年の月日は、君代に學校を卒業させて、下髪を島田に、美しく、心ばえも柔しい娘に作りあげた。柳一も留學を終えて歸つて来る、さうして二人は結婚する手順になつてゐたのであつた。さうした矢先、おりうもともく、柳一の歸朝を待つて待ちぬいてゐたのに、斯うした悲しい報知を聞くとは、誠に思ひがけない出来ごとであつた。辛さ、切なさ、遣柳なさ、苦しさ、あらゆる人生の悲痛が、この二人の上に襲つて來ても、この出来ごとには比ぶ可くも無い。

光明も消えた、希望も失せた、良人に先立たれてから、柳一が英國へ行つてから、何を樂しみに生きて來たのか、光明も希望も、たゞ柳一の身にかげられてあつたのではないか、君代にしても左様だ、幼くしては兄とも思つて親しく育ち、長じて娘となつては、行く末かけて幾千代の後までも一所にと、母もゆるし、自からも思ひこんだ柳一を、不慮に死して此世に何の樂みもあらう、友白髪の行く末までもと思つた戀人ではあり。杖とも柱とも頼む從兄でもある柳一に別れて、何を樂し

みに此の世には生き永へられやう。

『母さん、如何しませう。』

と、思ひに堪えかねては、育ての母なり叔母なりのおりうの膝に絶つて、よゝとばかりに號泣のであつた。

『君ちゃん……。』

と、おりうも唯泣いた。

『本當にこんなことが……夢では無いんでせうか。』

『夢ならばねえ、ああ、夢であつて呉れたらばねえ。』

『如何したらいいのでせう。如何したら……。』

『お泣きで無いよ、お泣きで無いよ。』

と、言ひながらおりうは、泉と湧く涙を停めかねて、

『何も柳一が死んだと決つた譯ぢや無いんだもの。』



「でも、如何して海へなぞ御入りになつたのでせうねえ。」

「其點がよく分らないんだから、死んだと決めるのは早いと思ふよ。」

「左様でせうかねえ。」

「左様ともねお前、ロンドンから寄越した手紙にだつて、早く歸つてお前と結婚するのを楽しみにしてゐるつて書いてあつた位なもの、自分から投身するやうな馬鹿なことはありやしないし……。」

「でもねえ、どうしたと云ふのでせう、一體……。」

「海を探しても死體らしいものも無いつて言ふのだから……。」

と、言ひかけて、おりうは、そつと涙をぬぐつた、玄關の方で、誰やら人の氣勢がしたからである。

「誰か来たやうですわね。」

と、これも涙を拭きながら立ち上つて出て行つた君代は、やがて間もなく引きか

へして来て、

「母さん。」

と、言つた儘、ほろ／＼と涙を流した。

「如何したの。」

「あの、關屋さんの奥様が……。」

「また入來つたの。」

「ええ、あの、兄様の御荷物を御届け下さつたの、お俵で……。」

「柳一の荷物？ やつぱり荷物だけだつたのだねえ。」

と、おりうは今更のやうに言つた。

## 六

その荷物……船の中に残つてゐたと云ふ主なな荷物を見ても、二人の悲哀は今



更のやうに胸を刺した。

「こんな事にならうとは、私どもも思ひがけなかつたので御座いますよ。」  
と、お舟も涙ながらにありし仔細を物語るのであつた。

浦鹽の郊外で、半子が柳一に危急を助けられたこと、それから急に思ひ立つて一所にシペリヤ丸に乗り込んだこと、敦賀の港へつくと云ふ朝甲板を散歩してゐるうちに不意と姿の見えなくなつたことなど、語るものも、聞くものも、顔はあげられなかつた。

「柳さんは、あれから朝鮮へ出て御かへりなさる御都合だつたのですけれども、私たちが無理に御一所に御願ひしたものですから、こんなことになつてしまつて、本當にお詫びのしやうも御座いません。」

と、お舟は語り終つて涙をぬぐつた。

「そんなことは御座いませんよ、みんな定る運なのですからね、それに死んだと決

つた譯では無いんですもの、何も、貴女がたのせいではありませんわ。」

「でもねえ、私たちがへ御一所に御願ひしなかつたら、こんなことにも成らなかつたのぢや無いかと、そればかりが残念で堪りませんわ。」

「みんな運ですよ、柳一の壽命が無かつたのですよ。」

と、おりうは涙をかくして言つた。

「運とは申しますもの、わたくしたちが御誘ひしたやうなものですから、どんなにか申譯がないと思つてゐるでせう。」

「まあ、そんなことは仰有らないがよう御座いますよ、私も諦らめて居ます。」  
と、涙をぬぐつて君代を顧みだが、

「此の娘には可哀想で御座いますけれども……。」

と、言ひ出して、又しても新しい涙を催はして來る、お舟は眼を君代にむけて、  
「柳さんの御妹さんで被在やいますか。」



「いゝえ。」

と、きつぱり、何と言はふかしらと思ひ迷つたが、柳一が死んだと決つた譯ではなし、萬々一、生命があつて戻つて來た場合に、面倒な話の起らないやうにして置いた方がよいと、早く決心して、

「私の妹の子ですから、柳一には從妹になりますがね、乳呑子のおきに母親に死れたものですから、それから私が引きとつて育てゝゐましたのです。」

「まあ、御氣の毒様にねえ。」

「實は私も折角手しほにかけて大きくした姪ではあるし、此娘も他に頼りにする親類もありませんし、これが母のやうに言へば、わたしも娘のやうな氣がしましてねえ。」

「御もつともで御座いますよ。」

「柳一が歸りましたらば、いづれ嫁も貰はねばならないのですが、わたしも氣心の

知れない嫁を貰つて苦勞しますよりは、此の娘ならばねえ、本人同志もお互に知り合つてゐる仲ですし、此の娘も他へ行くのは厭だつて申しますし、わたしも手放したくないし、いつそ柳一と夫婦にしようかと思ひましてねえ。」

「はい。」

と、言つて君代を見る、君代は赤くなつて疊の目を讀んでゐた。

「歸りましたらすぐ眞似ごとも御婚禮をさせやうと思ひましてねえ、私も樂みにしてゐた所なのですよ、それが……。」

と、おりうはほろくと泣いた。

嬉しい夢が破られて、悲しい事實を目の前に見る胸の悩み、心の痛み、君代は堪らなくなつて、わつと聲をあげて泣いた。



## 七

「御無理は御座いませんわ。」

と、言つて泣くばかり、お舟も慰むべき言葉を知らなかつた。

たゞ一人の子を、波路はるけき異國の空に思ひ寝の幾日幾夜、あくれば悲しや、其の子の行方は知れぬと云ふ、世にこれ程痛しいことがあらうか、親も兄妹もつい少女が、兄とも良人とも頼む従兄の歸朝を、指折り數へて待つた甲斐もないと云ふ、世にこれほど切ない事があらうか、まことに、世の中のありとあらゆる悲痛が一所になつて攻めて來たとも言はれる二女の境遇を、お舟も思ひやつて貰ひ泣の涙にくれてゐたが、

「それでは失禮いたします。」

と、挨拶するお舟の、黒縮緬の羽織の紋を見て、君代は何だか見覺のある紋だと

思つた。

「どうもいろいろ御厄介かけました、何れ、御挨拶に上りますが、どうぞ旦那様によろしく。」

「は、申し傳えます、けれど、本當に如何したのでせうね、お宅様へ來て斯やうなことを申しますのは、變ですが、實は二三日前に東京へつきましてね、伺つて話をしなければならぬ、つて申してゐながら、ついでに御氣の毒な御話なものですから、伺ひかねましてねえ、お宅の御門の邊までは來たのださうですけれども、つい入りかねて戻つたと云ふので御座いますよ、それでねえ、昨夜は、どうしても御伺ひしなければならぬ、つてねえ貴女、失禮な話ですけども御酒など戴きましてねえ、九時半、十時頃でもあつたでせうか、お宅へと申して出たのですよ。」

「御心配かけます。」

「お聞き申せば昨夜もとうとう御伺ひしないんですつてねえ、本當に如何したので



せう、今朝まだ宅へも戻らないのですよ。』

『まだ御歸り遊ばさないので御座いますか、まあ。』

と、言つたが、昨夜の怪しい人の姿を思ひうかべて、

『昨夜、十時頃と仰有いましたわね。』

『ええ、左様ですよ、それつきりまだ朝になつても戻らないのですよ、お宅へ伺はないのは、それはまあ伺ひにくかつたのでせうけれども、家へ戻らないと云ふのはどうも奇怪う御座いますわね。』

『左様で御座いますねえ、昨夜十時頃……としますと、左様いへば門の戸を叩きなすつたのが旦那様で御座いましたかしら……夜遅くではあり、何だか寂しい晩でしたから御返事しませんでしたけれども……。』

『御門の戸を……左様ですかねえ、ではやつぱり御門の所まで來ても、いいお話をするのでないし仕ますから、御起し申すのを遠慮まうしたのでせう。』

『それにしても昨夜御歸りなさらないと云ふのは奇怪しう御座んすわね。』

『その事で御座いますよ。』

と、お舟も打ち案じて言つたが、

『餘り遅くなつたので、電車も俾もなくなつて、何所かへ泊つたのかも知れませんが、斯うして御話してゐるうちに、もう歸つてゐるかも分りませんから、では、御暇いたします。』

と、そこへ挨拶をして歸つて行くのを、二人は見送つて玄關へ出たが、空の晴れ、雲の色、輝やくやうに見えるのも、惱みある心には悲しいものに思はれるのであつた、遠ざかつて行くお舟の後姿を見送りながら、黙々として寂しい顔を見合せた軒に、南の國から海を越えて渡つて來た燕が一羽、すいと飛んで空へ外れた。



## 血に啼く時鳥

「お父様は如何なすつたでせうねえ。」

と、半子は斯う言つて母の顔を見た、美しい顔も、この五六日の物思ひに、すつかり面やつれが見える。

「どうしたかねえ、久しぶりで東京へ歸つたのだから、彼方此方寄つて、引きとめられてゐるのぢや無いかね。」

と、さりげなく言ふけれども、お舟の眼にも、良人の行方を案ずる不安な色は掩ふ可くも無かつた。

「何方へ入来るにしても、何とか御沙汰して下すつても悪くは無いわ。」

「話をしてゐると、そんな暇もないものだよ、彼方此方で吞まされてゐるのだら

う。」

「怪しな所へでも入來つたのぢや無いでせうかしら。」

「さうかも知れないね。」

「人の心配もしらないで、何と云ふ暢氣なお父様でせう。」

「仕方ア無いよ、男は……。」

「だつて、餘りよ。」

「そんなに怒るもんぢや無いよ、外へ出ればどんな御用があるか知れやしないんだもの、中々女が家の内で考へてゐるやうなものぢや無いよ、男は敷居を跨げば、もう七人の敵があるつて言ふ位だからね。」

「敵？」

と、半子は厭な顔をして、

「本當に敵があるんでせうかねえ、厭だわねえ。」



「何も本當に敵があるつて言ふのぢやないよ、昔の人の言葉さ、昔の人がさう言つたのさ、つまり、男は外に用事も多いし、萬事油断なく立ち廻れつて教訓ぢや無いかね。」

「でも……浦鹽のことや、柳さんのことを思ふと、あたし、何だか本當に敵があるんぢやないかと思つてよ。」

と、半子は恐ろしそうに肩を慄はして言ふのであつた。

「浦鹽のことはとにかく、柳さんのことが如何したつて言ふの？」

「誰かあたし達に仇をしようと思ふものがあつて、柳さんが入來ては邪魔になるから、それで……。」

「そんな事があるだらうかね、お前。」

「あたし、何だか左様いふ氣持がして仕方がないの、だからお父さまだつて危険ぢや無くつて？」

「まあ、恐ろしい！」

「本當に恐ろしいこつたわ、もし左様だつたら如何しませう。」

「ああ、お前。」

と、お舟は恐ろしさうに室の内を見廻すのであつた。

その時、憂々として靴の音がした、半子は慌て、立ち上つて、

「あら、お父様が御歸りよ。」

「何を言つてるのだね此の娘は、お父様は和服で御出かけになつたのぢや無いかね、あれは靴の音ぢやないかね。」

「左様でしたわね。」

と、半子は、羞恥悪さうに座つたけれども、案内を乞ふ人の聲がしたので、又立ち上つて玄関へ出ると、そこには官服嚴めしい巡査が立つてゐた、何かしらす、半子の胸はひやりとした。



「此方は關屋さんですな。」

「は。」

と、おづく答へた。

「御主人はお在宅ですか」

「は、昨晚用事があつて出かけたぎり、まだ歸りませんが、何か御用で御座いますか」

「お歸宅にならない？ 昨晚出たぎり……？」

と、言つた巡査の太く濃い眉毛がびくくと動いた。

二

様子がおかしいので、お舟が玄關へ出て來た、巡査は首を傾げて、

「昨晚何方へ御出かけなすつたのですかね。」

「青山の方へ、ちよつと用事がありましたて出かけたのですか、まだ戻つて参りませぬのですが……。」

と、お舟は巡査の顔を見上げた。

「青山？、ちやいよく左様だな。」

「何で御座いますか、何か悪いことでもしたのでせうか。」

「いや、左様いふ譯ちや無い、實は御話するのも御氣の毒な譯だが……。」

「えッ？」

「先刻警察から照會があつたのだがね。」

「はい。」

と、お舟も半子も、呼吸を吞んで巡査の顔を見た。

「さうすると、たしかに御主人は昨夜青山へ出かけて行つたぎり歸つて來ないのですな。」



と、ビョウシ巡査もさすがに、はつきり用事を言ひかねない體であつた。

「左様で御座いますよ、あの、良人が何か悪いことをしたのでせうか。」

と、お舟はおろ／＼聲になつた。

「悪いことをしたと云ふのでは無いがね、實はその……。」

と、巡査は言ひ苦さうに、

「御主人はどんな風俗をしてお出かけでしたか、和服ですか、洋服ですか。」

「は、あの和服の方で御座いましたよ、黒羽二重の五つ紋付の羽織に、セルの單衣を着て……。」

「仙臺平の袴を履いてましたね。」

「左様で御座います、一體主人は如何したのでせう。」

仔細ありげな巡査の言葉に、お舟も半子も、何か恐ろしいものに脅かされるやうな心持になつて、胸も氣も落ちつかなかつた。

「青山の墓地内にね、四十七八の紳士が殺されてゐたと云ふのですがね……。」

と、言ひかけて巡査は口を噤んだ。

「えッ？殺されて？あの、それが手前どもの主人で御座いませうか。」

お舟の聲にも態度にも落ちつきは無かつた、半子は愕然として涙を吞んで、目の色を變へて巡査を見るばかり、聲は咽喉の外には洩れなかつた。

「御主人かどうか分りませんがね、着物の袂に名刺が入つてゐたので、それでもしやと思つて聞き合せに來たのですがね」

「名刺？」

「もつとも、その名刺には名前だけしかなかつたのですから、ひよつとしたら、御主人が他の知り合の者にやつたのか如何か分りませんからね、とにかくお宅で聞き合せたら分ることだと思つて實は伺がつたのです。」

「あの、關屋織三郎と云ふ名刺……。」



「左様のやうですよ、それに鉛筆で名刺の裏に此方の住所書が書いてあつたさうですから……。」

「ああ、やつぱり……殺されたのでせうかね、どうして殺されたのでせう……本當にどうしたと云ふのでせう……。」

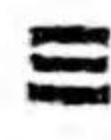
と、きれぐに言った。

「殺されてゐたのが御主人と云ふ譯はないでせう、名刺は一枚しかなかつたと云ふし、世の中には同じやうな羽織袴をつけてるものもありますからね。」

「如何しませう、もしやそれが主人でしたら如何しませう。」

「とにかく、現場へ行つて見たらいゝでせう、御主人か、それとも名刺をやつた御知合の人か、すぐに分るのですから。」

と、巡査は氣の毒さうに言った。



鶏の蹴合にも足をとれぬ、犬の喧嘩にも人垣をつくる物見高人心、恐ろしいものは見たく、隠すものは聞きたい人情、人間と云ふものは厄介千萬、その厄介千萬な人々が集つてわい／＼言つてるのは、青山の墓地下、麻布に近く人通りも稀なところであつた、一犬虚を吠えれば、萬犬實を傳えるとやら誰語り彼話すもなく集つて來たのである。

見ると無慘！

血が流れてゐる、人が倒れてゐる、あたりの樹に啼く小鳥の聲の、ほがらかな朝であつた。

「何です。」

と、言つたのは一人の私服刑事、洋服を着てゐる醫者は、死骸を改めて、一



所を調べてゐたが、

「疵は三個所ですな。背と肩と胸ですが、致命傷は胸です、餘程鋭利な刃物でやつたらしい、最初肩先から切りつけて、それから胸を突いたのですな。」

「是程の身装で、何も持ち物が無いところを見ると、強盗の所爲ですかな。」  
と、一人の刑事が言つた。

「さあ、如何ですかな。」

と、他の刑事は首を傾けて、

「遺恨と、物取と、兩方をふくんではゐませんか、懐中物を探して持つて行つたのは、強盗と見せる手段で、實は遺恨ばかりぢや無いかとも思ふが……。」

「その點もありますな、然し遺恨と云ふ事も、被害者の人柄にもよることですが……證據になるやうなものは落ちてありませんかしら。」

「何にもありません。」

「傷の具合と言ひ、證據になるやうなものを落して置かない様子といひ、實に膽の据つた奴が殺したらしいですな、何にしても仰有る通り意趣斬でせう。」

「どうも左様らしいですな。」

と、言ひながら、死骸の着物を調べてゐた刑事は、ふと袂の中から一枚の名刺を取り出した。

「ホウ、こりやいいものがあつた。」

「何です、名刺ですか。」

「左様らしいですね。」

と、讀んで見て、裏をかへして、

「鉛筆で書いてあるのでよく分らないが、ちよつと君、見てくれませんか。」

「どれぐ、成程、麻布區本村町十番地……關屋織三郎と云ふのですな、關屋と云ふのが此の男でせうか。」



「さあ、一枚しか無いのだから何とも分りませんね、關屋と云ふ人から、此の男が貫つたとも考へられますね、何所か途中で逢つて名刺を交換したので、その時、鉛筆で住所を書き添えたとも考へられますね。」

「左様ですな。」

「どにかく、この關屋と云ふ人の家を探ねれば分りますよ、こりやいゝ手がゝりが出来た。」

「まつたく……。」

と、二人の刑事は顔を見合せて快心の微笑を洩すのであつた。

「ぢや早速本署へ行つて、本村町を調べさせませう。」

と、先刻から黙つて見てゐた正服の巡查は斯う言つて二人の刑事を見た。

「どうか左様して下さい、そして關屋と云ふ人なり、家族なりにすぐ此所へ来るやうに左様言つて下さい。」

「承知しました。」

と、立ち上つて、

「こらく、そこに立つてゐちや不可い、見るものぢや無い、退けく。」

と、言ひながら、見物を追ひ拂ひ、靴音高く飛んで行つた。

#### 四

巡查の知らせを聞いて、氣もそいろ、心も空に、大いそぎで俥で駈けつけたお舟は、刑事が何か言つたのも夢中、俥を降りたのも夢中、何もかも夢のやうな心持ちで死骸の傍へ近よつた、死骸には白い布がかけてあつた、刑事の他に背廣服を着た検事や豫審判事もゐた、嚴めしくびか／＼光る正服を着てゐた警部もゐた、然し、そんなものは氣も心も動轉してゐるお舟には少しも目には入らなかつたのである。

「お前は誰ぢや。」



と、警部が怒鳴つた。

「は。」

と、初めて気がついて四方を見廻して、ハツとして立ち縮んだ、警部は重ねて、

「誰ぢや。」

「はい、私、あの私は。」

と、おどくした調子で、

「私は關屋の家内で御座います。」

「何、關屋？」

と、言ふ警部の耳許へ、先刻の刑事が何か低語いた。

「あゝさうか、よし〜。」

と、警部は首肯いて、柔しく、

「ちや奥さん、ひとつその死骸を見て下さい。」

「あの、よろしう御座いますか。」

「あ、よろしいどころか、御願ひして見て貰ひたい位ぢや。」

「は。」

と、近よつて、白い布を取なり、その淺ましい死體を見ると、お舟は我にあらず  
悲鳴をあげて、血に塗れた死骸に取りすがつた。

「如何しました、貴女の御知合かな。」

と、警部は劍をしつかり握つた、そこにゐた人々の目はみんなお舟に向けられる  
のであつた。

「あゝ如何しませう、あなた、あなた……。」

と、顔もあげずに泣いてゐる。

それは、疑ひも無く良人の織三郎であつた、昨夜家を出た儘、今朝になつても姿  
を見せない良人の關屋に相違なかつた。



いろ／＼の取調も済んで、死體を自分の家へ引きとつて来たときに、淺ましくも變り果た姿を見て、お舟の母親をはじめ、半子の妹弟たちは、前後不覺に取り亂して泣くばかり、支配人の鈴木傳次郎が、電報を見て浦鹽から駆けつけて来るその日までは野邊の送りさへも手順が付いては居なかつた。

何を言ふにも、あとに残つたのは女と老人と子供ばかり、途方に暮れてゐる所へ、急いで駆けつけて来た鈴木は働さぶりは、それは／＼目ざましいもの、それ／＼の片づけ、親類知己への沙汰、野邊の送り、ひとり身に引き受けて後指ひとつ示されぬ取り計らひは、召使ひとは言ひながら、骨身惜まぬ處置は、破れ船に乗つて大洋に漂つてゐるものが、大船を見つけた嬉しさにも較ぶる思ひであつた。

『本當に鈴木さんには御世話になります。』

と、お舟がしみじみ言へば、鈴木は事もなげに微笑して、

『なんの、これもみんな亡つた御主人の御恩の萬分一の働さです。』

と云ふ鈴木顔にも言葉にも、偽ならぬ誠の籠つて見えるのを、お舟は世にも頼もしいことに思ふのであつた。

## 五

野邊の送りも事なく済んだその日の夕であつた、お舟はそつと半子を呼んだ、此の日頃の悲しみに悩む半子の顔は、雨に悩む海棠の風情、わが子ながらも美しくいとお舟はしみ／＼半子を見た。

『何んだつてそんなにわたしの顔を御覧なされるの？』

と、半子は訊いた。

『何と云ふことも無いが、お前も苦勞をするわね、可哀想に。』



「苦勞するのはあたしばかりぢや無いぢやありませんか。」

「そりや左様だが、これからは取りわけお前が骨折りだと思つてね。」

「え？」

「お前、鈴木さんを如何思つて？」

「如何つて……。」

と、言ひかけて半子は口を噤んだ、何となくその話に觸れるのが面白く無いやうな顔色であつた。

「杖とも柱とも頼むお父様が、あんなことになつて見ると、これから如何して暮して行つていいのやら……お祖母さんもあれば、弟妹たちも澤山あつて、みんな勉強ざかりと云ふ年頃なだけども……。」

さう云ふ母親の心持はよく半子にも分つてゐた、浦鹽の店のこともあり、弟妹たちの教育、祖母の扶養、それほどいろいろの責任は、いかに同胞中の年輩でも、か

よわい半子の堪え得ることではなかつた。

「どうせお前も年頃なのだから、他家へお嫁に行かなくつちや成らないのだけれども、こう云ふ場合だからねえ。」

と、お舟は溜息と共に言つた。

一時養子をして店の事業も續けて行つて貰ひ、自分たちは東京にゐて養子から仕送つて貰へば、どうか斯うか子供も大きくすることが出来、祖母を見送ることも出来る……と云ふものだが、さうかと言つて、この際、この家族の扶養を引きうけてやると云ふやうな都合のいい養子はあるまい、困るのは其點である、然し、いい養子があるとしても、店の事情も分らない者では何ともいたし方が無い。

「鈴木さんならば、お父さんもあれほど信じて店のことを任せて置いたのだし、年頃も丁度お前と似た合だから、あの人を養子にしたら、大變都合がいいと思ふのだがね、お前、如何思ふね。」



と、お舟は言つてちつと半子を見た。

半子は、さすがに斯う言ひ出されると、羞恥しさが一ぱいだつた、厭ですとも言ひ切れなかつた。さりとしてすぐに承知してしまふと云ふ考へも出なかつた。

『もつとも、今が今、結婚すると云ふのぢや無いがね、さうしたら如何だらうと祖母さんも仰有るし、母さんも大變都合がいいと思ひますからね、それでちよつと話を置いて置くのだけれども、お前もよう考へてお呉れよ。』

『あたし、考へられないわ、あんまり急で、不意で……。』

と、半子は赤くなつて言ふ。

『ゆつくり考へとくれよ、今が今の話ぢやないんだから、何れ、お父様の百ヶ日でも濟んでからのことだけれどもね。』

厭だと云つても、お舟や、お舟の母親にとつては左様するより他に、一家を支持して行く目的はなかつた。半子は娘心、いろ／＼に思ひ悩んだ。

『でも、鈴木さんが何て言ふか……。』

『あの人は大丈夫だよ、ちよつと昨夜それとなく訊いて見たのだがね、異存は無いらしいから……。』

『……』

半子は無言の儘、涙に濡れた顔をあげて母顔を見た。

## 六

折ふし澁谷から、おりうと君代が弔詞を述べに来た。杖とも柱とも頼む一家の主人を、何れも突然に不慮のことで失つたこの女たちは、お互の身の不幸を語り合ひ慰さめ合つて湿やかな涙にくれてゐたが、半子は君代の勝れて美しい顔を妬しげにちよい／＼眺めてはゐたが、それが柳一の許婚であると思つた、戀ともならへば柳一が生きてゐても、自分の戀は遂げられなかつたのだと思つた、戀ともなら



で果敢なく捨てねばならぬ胸の思が半子は何かしらす寂しかった、それと同時に支配人の鈴木と夫婦にしたいと云ふ祖母や母の心持を考へた、やつぱり母の考通りにせねばならぬのかと、わり無く情なかつた。

半子が、そんなことを考へてゐるうちに、母親同志、お舟とおりうは湿やかな話が餘程進行してゐた、半子を支配人の鈴木に婚はせて浦鹽の店の方は相續らす續けて行くとしても言つたのか、おりうは、

『それはまあ御目出たう御座いますわね。』

と、晴やかな聲で言つて半子の方を見たが、すぐに暗い顔をしてわが娘とも嫁とも思ふ君代を見た、君代は黙つて俯向いてゐるばかりであつた。

二人の娘を比べて見て、二人の親は別々の意味でその不運を可哀想なことだと思ひやつてゐた。

『君や、餘り遅くならないうちに歸りませうかね。』

と、話が途切れると、おりうは斯う言つて君代を促した、君代は温順しく點頭いた。

おりうと君代が暇を告げて玄關に出ると、お舟も半子も續いて送つて出たが、見ると、庭の片隅、植込の木の間にぼんやりと人の影が立つてゐるやうであつた。

『あれ、母様。』

と、君代は小聲で言つておりうの袖にとりすがつた。

『どうしたの。』

『あの。』

と、再び、顔をあげたときには、その人の姿は見えなかつた、君代は總身に冷水を浴びせられたやうに感じた。

『如何したつて言ふの。』

と、おりうは重ねて訊いた。



「あの、此の間の人にそつくりと云ふ怪しい人が見えましたの。」  
「えッ？」

と、おりうもびつくりして目を睜つた。

君代はその人が、寫眞で見た此處の主人の關屋と些とも異はないと言つた、さう言はれて見れば、おりうがあゝの晩見た怪しい人も、此處の主人と同じ富士の絞のついた羽織を着てゐた、青山の墓地下で殺されたときの羽織袴は、その晩に二人が見た羽織袴と寸分異はなかつた。

「おかしいね。」

と、おりうは思つた。

一度ならば何でもないのである、然し、二度までも見ると云ふのは不思議な話である、それを君代が見るといふのも不思議な話である、夜夜中、羽織の紋や袴の縞目がはつきり分つたと云ふのも不思議なことである、然し、その不思議を、また

それほど親しくないお舟母娘に打ち明けやうと云ふ心組にもなれなかつた、いや、それよりも、これから自分たちが是からの生活の方法を考へることが、何よりも至急の問題であるので、その不思議を詮索するほど心に餘裕は無かつたのである。  
おりうと君代はさりげなく玄關へ出て、やがて靜かに告別の挨拶をするのであつた。

## 七

「どうも御多忙中、わざわざ御入來下つて、有り難う御座います。」

と、そこでお舟はまた繰りかへして今晚の二人の來訪を謝した。

「いゝえ、どうしまして、柳一でも居りましたら、何とか將來の御力添も出来るのでせうけれども、何を言ふにも女ばかりで……………」

「本當に左様仰有れば柳さんは……………」



と、話が柳一の身の上になると、またしても新しい哀愁を覺えた、しばらく一同が黙つてゐた。

それは、雨でも降るのか、何となく頭の惱ましい夜であつた、青葉若葉の匂ひも胸を刺すかに思はれる夜であつた、月も星もない曇つた空が、暗く低く軒にまで迫つてゐた。

「本當に柳さんは如何なすつたのでせうかねえ。」

と、お舟は今更のやうに言つた。

「今まで分らないのですから、もう生きてはゐないのでせう、わたしたちはもう諦めてゐますの。」

「本當に御氣の毒ですわね。」

「いえあなた、みんな是もお互に授けられた運ですよ。」  
と、おりうは横をむいて涙をぬぐつた。

血に啼くと云ふ時鳥、それよりも辛い涙をさりげなく運だと言ひ紛らすおりうの心は悲しいと、半子はしみ／＼思ひめぐらすのであつた。

「母さん、もう御暇ませう。」

と、君代は、こう云ふ悲しい話の中にいつまでも交つてゐると、更に悲しい追憶を誘つて、涙が留度もなく流れて來ることが堪えられなかつた。

二人はやうやう挨拶をして關屋の門を出た、その後姿が闇にまぎれて見えなくなつたのも悲しい運命の象徴だと、半子はちつと闇を覗めてゐたが、ふと心づいて顔をあげて、

「母さん。」

と、呼んだ。

「え？」

「あの方たちも不幸ね。」



「お互にね。」

「君代さんの御心が如何なだか、あたし、しみじみ御察しするわ。」

と、そつと涙をぬぐつた、お舟はわが娘の悲しい言葉を訊いた、戀を失つた君代を痛々しいと思ふ半子の心は、やがて、自分も戀を捨て、心にもない人に嫁がねばならぬ自分の心を痛む心に外ならないのだと思ふと、さすがに物哀れになつた。

「母さん。」

「え?。」

「お互に授けられた運だつて、あの伯母さんが仰有つたけれども、母さん、あたしも諦りめますわ。」

「諦らめるとは?。」

「運でつわね、わたしが鈴木さんと夫婦になるのも、みんな前世から決つてゐた運なのですわね。」

と、半子は忍び音に泣いた。

「半ちゃん、承知してくれませんか。」

と、お舟はそつと半子の肩に手をかけて、悼しそくに涙にぬれた顔を覗き込むのであつた。

「左様するより外に、仕様がなインですもの、仕方がないわ。」

「あ、半ちゃん。」

と、お舟はほろ／＼と泣いた。

思ひ／＼のため涙、若葉を吹く風がひやりと身に冷たい、明日は雨にでもなりさうな、二人の心は曇つてゐた。



## 運命の渦巻

關屋の法養が濟むと、支配人の鈴木傳次郎は一旦浦鹽の店へ歸つたが、それから四十九日も過ぎて、新盆も過ぎて、涼風の立つ九月の初めになると、鈴木は再び上京して来た、半子と、鈴木が日比谷の大神宮で結婚の式をあげ松よして披露をした時に、澁谷のおりうと君代も招待したけれども、その招待の手紙は空しく附箋が澤山ついて戻つて来た、何處へ轉居したか、それさへも分らなかつた。

「お氣の毒ですわね。」

と、半子もお舟も、しみじみ言つた。

一家の杖とも柱とも頼む主人が、不慮の災難で死んでしまつたのだから、あとに残つた女二人、今までの家を持ちこたへて行くことが出来なくなつて、何所か塙末の

小さい家へ引き越して、細い煙を立てゝゐることであらう。

「出来ることなら、探し出して御世話をしてあげたいものです。」

と、鈴木は眞實らしく言つた。

「本當にね、あの人が死んだのも、言はゞ私たちが御一緒に來たのが原因なのだから、左様しなければ濟まないやうな氣がしてゐてね。」

と、お舟も言ふ。

然し、おりう母娘の行方は分らなかつた。

半子と、鈴木の結婚の式は滞りなく濟んで、この新夫婦はすぐに浦鹽の店へ行くことになつた、東京驛へこの新夫婦を見送つたお舟は、今更のやうに半子の美しく丸鬢姿を見て、ほろりと涙をこぼした。

「せめて、御父様を殺した者の手が、りでもあつて呉れゝばねえ。」

それを言ひ出されると、半子も鈴木も暗い心持になつた、嬉しい新生活に入る明



るいた路に、一點の曇を投げてゐるものは、實に父親の下手人がまだ不明ないと云ふ一事であつた。

「お父様が入來つて、それで二人が斯うなつたのなら、どんなにか嬉しいでせう、でもねえ、死亡つたものは今更何といつても仕方がないのだから、せめて殺した者でも見つかつてゐればねえ、どん なにか……。」

と、お舟は愚痴のやうに言ひ出した。

「店の方さへなければ、私もお父様なり御主人なりの敵ですもの、草をわけても探したいと思ふのですか……。」

と、鈴木は、その下手人の分らないのを、さながら自分の不行届のやうに言つて詫び入るのであつた。

「何もお前のせいだと云ふのぢやありませんよ。」

と、お舟は笑つて、

「政府もあることだもの、いつまで分らずにゐるものかね、それよか、お前さんたち二人は、夫婦仲よくしてね、浦鹽の店をもつと立派に、大きくして下さいよ、それがお父様へ何よりの孝行です。」

「そりやもう仰有るまでもありません、及ばすながら一生懸命やりますよ。」

「左様しておくれ、母さんもそればかりを楽しみにしてゐますよ。」

と、云ふお舟の目には涙が一ぱいだつた。  
浦鹽へ行つてからの身體の注意やら何やら、細かいことまでお舟はくどくと言つて聞かせてゐた、鈴木も、半子も、たゞ黙つて聞いてゐた。

新夫婦を乗せた汽車が出て終つても、お舟はいつまでもプラットホームに立つてゐた、名残は別れてもまだ盡きなかつた、舟子と鈴木は、汽車の窓から顔を出して手巾を振つてゐた、やがてその手巾も見えなくなつた、お舟は手の内の玉を取られたやうな心持になつて停車場を出たが、ふと、停車場の前で自働車に乗らうとして



ゐる立派な紳士を見た。

二

『おや。』

と、お舟は思はず聲をかけて走り寄つたときに、自動車は勢よく疾走してしまつた。

『まあ、如何したと云ふのだらう、柳さんのやうだつたが……然し、他人の空似と云ふこともあるし、死んで終つた柳さんが此所らにゐる筈はないのだから……それにしてもあの人のお母さんは如何したらう。』

と、思ひながら電車通りの方へ歩いて行くのであつた。

馬場先門で、電車に乗らうと思つたが、混雑してゐて乗れなかつた、どうせ日比

谷で乗替なければならぬのだからと、色の褪めかゝつたが洋傘で日光を除けながら歩つて行くと、お堀端に一輛の自動車が停つてゐた、タイヤでもパンクしたのかそれとも他に故障でもあるのか、運転手がタイヤをいぢつてゐる、その傍で二十八の美しい青年紳士が何か頻りと指圖してゐた。

『あ、先刻の人だ。』

と、その横顔を見るとお舟はさう思つた、何さま、先刻停車場で見かけた佐倉柳一に似た人である。外に用事がある風をして、わざとお堀の方へ寄つて歩いた。

『どうしても柳さんに異ひない。』

と思つた、その目、その鼻、その口、如何しても柳一のやうだつた、日本海で死んだ人が此邊にゐる譯はないが、然し、何かの具合で助けあげられて東京へ来たのかも知れない、間違つたら間違つたときのこと、お舟はつか／＼と自動車のそばへ寄つた。



「失禮ですが……。」

と、云ふと、此方を向いたその顔！

「貴方は佐倉さんでは御座いませんか。」

と、聞いた。

若い紳士は、お舟に呼びかけられて、ちよつと驚いた様子だったが、然しさり氣ない風で、

「何ですか。」

「あの、失禮ですが、あなたは佐倉さんちや御座いませんか。」

「いや、私は佐倉と云ふ者ではありません。」

「ま、どうも失禮しました。餘りよく似てらつしやるものですから、ついお呼びかけ申して、誠に済みません。」

と、お舟は羞恥惡げに言つて叩頭をした、然し、顔立ばかりではない、その聲さ

へも似てゐるのが、心の内では不思議でならないのであつた。

「どうしまして。」

と、紳士は顔を背向けて、運轉手に何か指圖をするのであつた。

「本當に失禮いたしました、お聲まで似てらつしやるものですから。」

「佐倉と云ふ人にですか。」

と、横を向いた儘、

「はい。」

「他人の空似、廣い世の中ですからね。」

「左様で御座いますわね、どうも飛んだ失禮をいたしました。」

「いや。」

と、紳士の言葉は重々しく簡單である。

「御免下さいまし。」



と、洋傘を傾けて、お舟は羞恥悪げに挨拶をして歩き出した、しばらくして振りかへつて見ると、件の青年紳士はちつとお舟の方を見送つてゐたが、お舟が振りかへつて見ると、少し慌てたやうに顔を背向けた。

どうもおかしい、變だ、他人の空似だつて、聲から姿まで、あんなによく似てゐる人つてあるもんちや無い。

と、呟きながら日比谷の方へ歩つた。

三

ふと思ひ出して青山行の電車に乗つた。

澁谷の、もとの柳一の家を訪ねて見やうと思つたのである、勿論、そこにおりう母娘のゐないと云ふことは承知してゐたけれども、長年住んでゐた關係もあるから、もしや何かの手掛りがあるまい譯でもないと思つたのである、電車を降りて道玄坂

を下つて心覚えの家の方へ行つたが、如何やら曲り道を間ちがへてしまつた。

「ちがつたかしら、はてな、此所の路次を斯う行つて……。」

と、考へてゐると、向ふから二十五六の女が來た、三つばかりの子供を背負てゐる。

「もし……。」

と、聲をかけた、自分であつち此方探しまわるよりは、聞いた方が早いと思つたのである。

「はい、わたしですか。」

「一寸御聞き申しますが……此の邊に佐倉さんと云ふお家がありましたか……。」

「佐倉さん？」

と、女は首を傾げて、

「佐倉さんへ被來やるのですか。」



「は、左様ですよ。」

と、お舟は言つた、今住んでゐる人の名前を言ふよりは、佐倉といつて聞いた方がよく分ると思つたからである。

「あなた佐倉さんへ被來やるのですね。」

と、女は念を押した。

「ええ、左様です、然し。」

と、お舟が、その仔細を打ち明けやうと思つたときに、女は言葉忙しく、

「佐倉さんは今お在住になりませんよ、私も實は佐倉さん 訪ねて來たのですけれども。」

「え、あなたも……？」

「はい、私もやつぱり佐倉さんを訪ねてね、わざわざ府下の田端から來たのですけれども、何所かへ御越しなすつたそうですよ、それも、五月の末だと申しますか。」

ら。」

「御轉居先は分らないのですか。」

「それも分らないそうですよ、本當に如何したのでせうね。」

「左様ですか、分りませんか。」

と、お舟は溜息をついた。

「あなたは佐倉さんの御知合で御座いますか。」

「ええ、左様ですよ、貴女は。」

「わたしは、もと佐倉さんのお宅に御奉公をしてゐたものですけれども……本當に如何したと云ふのでせう、少しは御様子をお存じでは御座いますまいか。」

と、女は力なげに言つた、背中の子はすやく／＼眠つてゐた、柳一の家を奉公をしてゐたと云ふこの女と、お舟は並んで元來の方へ戻つて行くのであつた、初秋の日の光、残る暑さ、何所やらで啼く法師蟬の聲——女は柳一のことすら知らぬげな様子



であつた。

その女は、柳一家に五六年も女中奉公をしてゐた赤坂の音羽と云ふ女であつた、然し此の音羽は太十とは異つた待合の女將である、二十の時にある會社員の所へ嫁に行つた、新世帯を持つて樂しかつたのは三四年で、良人は事業に失敗して不義理の借財が出来て、身代限りをして滿洲の方へ夜逃同様に行つてしまつた、音羽は、たの時懐妊してゐたが、仕事も出来ず、親類へも頼つて行けず、困つてゐた。

「何と云ふ御情深い奥様でせう、私を引きとつて下さつて……。」  
と、語り次いで女は泣いた。

斯うして良人の留守の間、再び柳一家の女中になつて働いた、此の子供もその時面倒見て貰つて生んだ子である、その内に久しく消息のなかつた良人から、手紙と一所に金などを送つて呉れたので、暇を貰つた——と、音羽はいかにも嬉しさに堪えぬと云ふ風で語つた。

## 四

同じく佐倉の家を訪ねて来たものと言ひながら、お互ひに見ず知らずの他人である、その人に、斯うして自分が世話になつたことを打ち明けるのは餘程おりの親切を思ひ感じてゐるからであらうと、お舟はしみじみ思ふのであつた。

「本當に如何して御轉居なすつたのでせう、貴女は御存じありませんか。」  
と、音羽は聞いた、お舟は暗涙を呑んで、

「貴女は何にも御存じないのですね。」

「はい。」

「英國へ行つてゐた柳さんを御存じですか。」

「あの、若旦那で御座いますか、ようく存じてますよ、たしか今年に御歸朝なさる御都合のやうに承りましたが……。」



「さあ、その柳さんが御歸りになれば文句はないのですがね。」

「えッ？、若旦那が如何かなさいましたのですか。」

「柳さんが……………」

と、しばらく躊躇つてゐたが、

「死亡つたのですよ。」

「まあ？」

と、音羽は呆れて言葉もなかつた。

隠して置く譯にも行かないので、お舟は有りの儘を打ち明けた、餘りの意外に音羽は人目も構はず、往來中で聲をあげて泣き出した。

「本當にまあ、如何したと云ふのでせうね、折角立派になつて御歸りなさらうと云

ふ間に……奥様も御嬢様もさぞ、ああさぞ……………」

「何と云ふ御氣の毒な譯なのだか、わたしも……………」

と、お舟も涙をこぼした。

「本當に如何なすつたのでせう、まさか若旦那が投身をなさる譯もありませんし、

間ちがつて海へお落ちなさるやうな心得の悪い方でもありません……………」

「本當にみんな不思議にしてゐるので御座いますよ。」

「不思議ですわね。」

と、言つたが、思ひ出したやうに着物の前を叩いて、

「五月の半頃と仰有いましたわね。」

「何がですか。」

「その浦鹽をお出立になつたのは？」

「ええ、左様ですよ。」

「浦鹽へはわたしの良人も一年ばかりゐたことがありますし、やつぱり五月の半頃日本へ歸つて來たのですが……………」



「あなたの旦那が浦鹽に……。」

「ええ、關屋さんとか云ふ貿易商がありますが……。」

「えッ、關屋？關屋を御存じですか。」

と、お舟は愕然として叫んだ。

「いゝえ、關屋さんは存じませんが、その方の支配人をしてゐます鈴木さんてえ方に、大變良人が御世話になつたとかつて申しましてね。」

「えッ、鈴木、鈴木を御存じですか。」

「貴女は鈴木さんを御存じですか。」

と、音羽は不思議さうに聞いた、お舟も不思議さうに、

「ええ、知つてますとも、鈴木は私どもの店の支配人ですもの。」

「えッ、それぢや貴女は？」

「わたしは關屋の家内ですよ。」

「まあ、奥様……。」

と、音羽はまた更に驚かされた。

何と云ふ不思議なめぐり合せであらう、佐倉の家に長年女中奉公をしてゐた音羽の良人が、鈴木に世話になつたことがあつて、しかも浦鹽にゐたことがあるとは——運命の渦巻は何所から如何巻いて行くか、人間の力では計り知られぬものである。

### 悪魔の叫び

—

浮世の波は、幸いが上にも辛かつた、依頼る主人を失つて悲嘆の涙にかはかぬ袖を、憎や、またしても物思はせる花の下風、母のおりうは八月の初め、ふとした風邪が原因となつて、もう二月ばかり頭もあげずに寝てゐる、夜の日も合はず看護介



抱する君代が心の果敢なき。

「ああ、如何してこんなにわたし達は不幸なのだらう。」  
と、思ふまいとするが愚痴、涙も交つて出る。

秋風の立つ昨日今日、心細きはこと更であつた、咳に絶えある母の身の疲れ、齧さへも厭だと云ふのを見聞きすると、此の上萬一のことでもあつては如何にか情ないことであらう、戀しい良人に別れてあるに甲斐なき此の身は厭はじ、替となりても母の玉の緒つなぎとめてと、神頼み、佛を願ふも娘心、母の寝顔を眺めてほろり落した露時雨、虫も痛むか絶たえに椽のあたりで啼いた。

「君や、もういゝから休んどくれ。」

と、言ふ母の聲も涙にうち濡る、咳入りながら君代を見上げる。

「いいえ母さん、まだ早いのですもの。」  
と、尙頭を叩いてゐる。

「本當に長い間苦勞をかけますね、暑いのも厭はないでやさしい介抱、死んでも母さんは忘れませんよ。」

「いやよ母さんは、死ぬ死ぬつて、そんな心細いことを仰有らないで早く快つて下さいな。」

「でもねえ、こんなに長引くんだもの、わたしや今度は駄目だよ。」

「あれ、また母さんが……病は氣からつて言ふぢやありませんか、そんなに弱い氣を出しますと、全快る病氣も悪くなるものですよ。」

「さう言つてお呉れなのは有り難いけれども……わたしや逆も助からないよ、わたしはもう年を老つてるのだからいつ死んでもいゝけれども、老先長いお前は……此の上、お前まで煩ふと大變だから、氣をつけておくれよ。」

「わたしは丈夫ですから御心配には及びません、けれども母さんはそんな悲しいことばかり仰有つて、縁起でもないわ、今日もお醫者様が大層快い方へ向いたから安



心だと仰有いましたよ。」

「お前に心配かけて、濟ないね。」

「濟ないくつて、わたしこそ十分の御世話も出来ないで、どんなに申譯が無いと思つてるでせう、これまでに大きくして頂いた御恩を思へば、わたしの身はどうなつても、母さんはもう一度御丈夫にしたいと、さう思つてる位なのですもの。」

「大きくしたいと云ふばかりで些とも面白い目も見ないで………柳一でも歸つたらどんなにでもしてお前を………」

「母さんく、もうそんな悲しいことは仰有らないで、さ、お薬を召しあがつて早く快くおなり遊ばせよ、ねえ。」

「快くなりたいよ、快くなりたいけれどもね………」

「快くなりますとも、わたしの思だけでも快くして御目にかけますよ、それにしてもお薬召し上つて下さらなければねえ。」

「飲みますよ、飲みますよ、お前に餘計な心配をかけちや濟ないもの、飲みますよ、飲んで快くなりますよ。」

と、顔を背向けてほろりとする。

その横顔！さても瘦せ衰へた、澁谷にゐた頃は切り髪さへも、尙若さを添えて見せた母様が、こんなにも瘦せ衰へて、二月ばかりのうちに十も年を老つて見えるのが悲しいと、君代の涙も袖に重かつた。

二

澁谷の家を引き拂つて、二人が此の下谷も郡部に近い三の輪の裏長屋へ轉居したのは、六月初のことであつた、君代は、三河島の小學校の先生になつて、おりうは留守をしながら裁縫などをして、先は不足のない生活をしてゐたのは僅かの夢、八月の初から風邪を引いたのが原因で病みついたおりうは、



『九月になつて、お前の學校が始る頃には全快るだらう。』

と、自分も言ひ、君代も左様信じてゐたが、その九月が來てもおりうの病氣はよく成らなかつた、そればかりでは無く、病氣は一層悪くなつて、手放してをいて學校へ出かけて行くことも出來ないので、君代はもう二十日餘りも學校を休んでゐるのであつた。

『お前、學校の方はいゝのかい。』

と、病人のおりうは時折氣にして聞いた。

『え、構ひませんの、校長さんにもよく話して置きましたから。』

『左様かねえ、でも餘り休んでゐたら辭職せられるやうなことは無いかい。』

『まさかねえ、でも、辭職せられても宜う御座んすわ、斯うしてお傍にゐて御看病しながら御裁縫でもしてゐる方が、結局氣樂ですもの。』

『左様だねえ、何にしてもお前にはづかり心配かけるよ、濟まないわね。』

『あら、また母さんは……何ぞと云ふとすぐ濟まないなんて仰有るんだもの、娘が親の御介抱をするのは普通ぢやありませんか。』

『あたりまへのことでも、お前のやうには出來ませんよ、わたしや、つくづく有り難いと思つてゐますよ。』

『厭ですわね、有り難いの何のつて、穴があれば入りたく成りますわ。』

『親なればこそ、娘なればこそ……とは思ふけれども、その娘の親切が親にとつては嬉しいものですよ。』

と、おりうはいつもく泣く。

母と娘と、斯うした寂しく果敢ない日が幾日も續いた、おりうの病氣は中々よく成らなかつた、九月も過ぎて十月になつたけれども、君代は安心して、病氣のおりうをひとりのこして學校へ出ては行けなかつた。

『母さん、あたしはいつそ學校を辭職やうと思つてます。』



ある日、君代は斯う言つて母の枕もとで低語いた。

『そりやお前の心任せだけれども、母さんも少しはよくなつたのだから、もう一人で留守居をしてゐても大丈夫だよ。』

『でも、病人の母さんを置いて毎日家をあけるのは心配ですし、學校へ行つても厭なことばかりなんですもの。』

と、君代は厭さうに言つた、人を教へる先生と云ふ豪い人の集つてゐる學校の教員仲間にも、山久のやうな奴がゐて、美しい女に厭なことを言ひかける、君代はそれがしみるゝ厭はしかつた。

『お前のいゝやうに……。』

と、おりうも強いて勧めはしなかつた。

『そのかはり、一生懸命御裁縫をしますからね、決して母さんに御不自由はさせませんよ。』

とは言ふものの、それは自分ながら不安心な言葉であつた。

『本當にお前には苦勞をかける。』

その美しい顔を見るにつけても思ひ出される、柳一さへ無事で歸つて呉れたら、今時分は若夫婦揃つて自分の世話をしてくれることも出来たらうのにと、歸らぬ過去が愚痴のやうに思はれる、君代だつて若いのだもの、柳一がゐないと決つたらいつまで獨身でをく譯にも行かないのだが、然し……。

『如何したらいいだらう。』

と、おりうは本當に思ひ迷つた。

三

けれども然し、君代は何所へも嫁には行かないと言つてゐる、一生お母様のそばにゐたいと云つてゐる、幼くしては眞實の兄とも思ひ、やゝ長じては將來の良人ぞ



と、心に深く彫つけられた柳一より外に、嫁の結婚のと、そんなことは訊きたくはないと言つてゐる。

「さう言ふお前の志は嬉しいけれども、お前だつて若いのだもの、いつまで獨身でも置けないからねえ。」

と、おりうがいへば、君代は顔色を變へて。

「若いから獨身でをくのは危いつて仰有るのですか、若いから、この後如何考へが異ふか分らないつて仰有るのですか、そりや餘りです、二十年も育て、下すつて、母さんにはわたしの心が分らないのでせうか、わたしやそんな節操のない女ぢやありませんわ。」

と、泣いて言つた。

「左氣云ふつもりで言つたのぢや無いよ。」

「わたしや柳さんの妻です、わたしの良人は柳さん一人、今更獨身で置けないなん

て、母さんも餘り情ないことを仰有るわ、わたしに柳さんの他の良人を持ってなんて、餘りひといと云ふものですわ。」

「有り難と君や、お前のその志を柳一も黄泉で喜んでゐましょ。」

と、老の涙の先立つて、おりうはたまらず泣き出すのであつた。

世智辛い世の中に、娘一人の手で病氣の母親を養つて行かうと云ふのは、並々ならぬ苦勞であつた、母の介抱を手ひとつにするさへも骨折なのに、藥の代、日々の米の代、家賃、電燈料、薪炭の代、そんな細々したもので數へると、おりうの柔しい姿では逆もやり切れまいかと思はれた、然し君代は一生懸命につとめた、三度の粥の加減、藥の按配、時には身體を拭いてもやり大小便の世話から足腰の按摩まで、痒いところへ手の届くやうによく努めた、その上ならず、夜は十二時、一時頃まで内職の針の手を動してゐた。

「濟ない〜。」



と、おりうは日に幾度となく言ひ出しては泣き、泣いては言ひ出して君代の介抱を感謝した。

さう云ふ苦勞をしてゐるうちにも、おりうの病氣がだん／＼と快方にむいて来たのは、何よりも嬉しいことであつた。

『よう御座んしたわね、もう大丈夫ですよ母さん。』

と、君代は、母の顔色の目に見えて快なるのを感じた。

『これもみんなお前の骨折ですよ、お前のために命拾ひをしたやうなものですよ、本當にお前のおかげだよ。』

と、おりうは手を合せないばかりにして、ほろ／＼と泣くのであつた。

さうした喜びも、束の間であつた。おりうはこの十五日には間異ひなく渡すと言つた八月と九月の、二月分の家賃の才覺をせねばならなかつた、おりうが病みついてから、藥やら醫者の診察料やらに追はれて、ついに言ひ延べて来た家賃二つ分、

さし當つての心配であつた。

貯蓄の金も消費はたして、目ぼしい道具も賣り拂つて、今は本當に着のみ着儘の身體、冬が来ると云ふのに、綿入がまだ質屋に藏つてある位の始末だから、十圓ばかりの家賃であつても、中々才覺はつかかなかつた、如何しやうかと思つてゐるうちに其日が来た。

『御免よ。』

と、ばかり、ぬつと世界に類の無い魂消る大きな鼻の付いてゐる鬚面をさし入れたのは、本名があるのだらうけれども、誰でも知つてゐる者は無い、鬼竹と云ふ緋名で通る家主であつた。

#### 四

病氣の母親に氣象をしながら、君代が小聲で辨解するのを聞き入れればこそ、鬼



竹は惜々しげに大きな煙管の雁首をコック／＼叩きながら、

「その言譯は聞き飽きやしたよ、今日のはかねての約束だから是が非でも貰つて行かなくつちやならねえ。」

「恐れ入りますが、もう少しお待ち……。」

「いや待てねえ、少しも待てねえ、今日は何でも綺麗にするからと云ふ約束だ、家賃が拂へなきあ家を明け渡して貰ひやしやう、あつしの方ちや、一年分位前家賃で借りやうつてえお客様が山ほどあるんだから……。」

「そこを何とか御勘辯下すつて。」

「いや勘辨ならねえ、如何あつても勘辨ならねえ、二ヶ月も三ヶ月も無家賃で住はれちや此方の腹が乾上つてしまふ、冗談や慰さめに家主をしてるんちやねえ。」

「申しかねますが此の月末までお待ち下さいまし、決して御迷惑はかけませんから。」

「御迷惑を掛けねえどころちや無え、三月も家賃をためられたんだ、こんな迷惑なことはありやしない、さ、今日は早速立ち退いて貰ひやしよ。」

「病人もありますことですから、どうかもう少し御待ち下すつて……。」

「病人のあるなあ此方等の知つたことちやねえ、手前の勝手に病人になつたのだ。」

「まあ。」

と、ばかり、餘りの理不盡に呆れて言葉も次げない、鬼竹はますます／＼猛り立つて、

「家賃が入れられねえんなら、そのかはり、此處の家財道具を持って行つて預かつて置かう、そしたら今月末まで待つてやらう。」

「家財道具と申しますと？」

「そこらに蒲團もあれば着物もあるだらう、お母様の着てねてゐる夜具なんざあ中立派なしる物だ、そいつを貰つて行かうちやねえか。」



「こればかりは何卒……………」

「ちや金を貰つて行かう。」

「お金は……………」

「金も寄越さねえ、道具も渡さねえと云ふのは、ちつと蟲がよすぎるせ、蟲も殺さねえやうな顔をしてゐて太え餓鬼だ、さ、退かねえか。」

と、矢庭に座敷へかけ上らうとするのを、君代はしつかり袖を捉へて、

「どうぞ御待ちなすつて、あのどうぞ……………」

「いや、待てねえ、今日は家賃を入れて貰はふか、さもなきあ此所を立ち退いて貰はふ、さ、立ち退いて貰はふ……………」

「そんな御無理ばかり……………」

「何が無理だよ、何が無理だよ、二月も三月も家賃を待つてやつてよ、それで無理だの強慾だの言はれちや堪らねえ、さ、そんな店子は一日も置くことは出来ねえ、

出て行つて貰はふ。」

「どうぞ御勘辨なすつて……………」

「勘辨も糸瓜もあるもんか、出て行かなきあ、此の夜具を貰つて行つて、當分預かつて置く。」

「あれ、どうか……………」

と、母の寢床の方へ行かうとする鬼竹の袖をしつかり引きとめた。

その時、ばたくと云ふ足音がして、二十四五になる櫛卷の女、三才ばかりの男の兒を負つて入つて來たが、

「御免下さいまし、佐倉さんのお宅は此方さまですか。」

と、覗いたが、此の場合返事が無い。

見ると、此の有様である、つかくと飛び込んで鬼竹の袖を取つて引き戻し、  
「何を爲るのです、失禮な。」



と、云ふ顔を見て君代がびつくりして、

「あ、音羽ちや無いか、お前。」

と、叫んだが急には言葉も次げなかつた。

## 五

「お嬢様、奥様、まあ〜。」

と、ばかり、音羽も二の句はなかつた、漸やくに訪ねあてた舊主人の家が、見るも無惨な破家、身装にもふりにも構はず燻ぼけた君代、病み衰へたおりう、何れもありし日の面影もないと、音羽はたゞさめぐと泣いた。

「お前、龍吉の妻君ぢやねえか。」

と、鬼竹は音羽を見て言つた。

「左様ですよ、龍吉の女房の音羽ですよ。」

「何だつてこんな所へ来たんだ、今日はお前の家へも行かうと思つた所だぞ。」

「何時でも御入來なさいまし。」

と、音羽は落ちつきはらつて言ふと、君代を顧みて、

「御嬢様御心配なさいますな、わたしが引き受けますから。」

「いいの、音や。」

「ええ、御心配なさいますな、いづれゆつくりお話をしますが、ちよつと失禮して……。」

と、鬼竹にむかつて、

「ちよつと彼方へ御入來下さい、御手間はとらせません。」

「此所だつていいぢや無えか。」

「御病人もありますし、お嬢様だつて世間馴れない方ですから。」

「さうか、何にしてもお前の勘定も、此所のも綺麗にしてくれるのだらうな。」



「御念には及びませんよ、さつさと外へ出て下さい。お嬢様、ちよつと失禮しますよ。」

と、音羽と鬼竹は戶外へ出た。

外へ出たが、音羽もさすがに困つた、口では綺麗なことと言つたものゝ、金を持つてゐる譯ではなし、まして、自分が今住んでゐる家も鬼竹の家で、これはもう家賃が三月分も溜つてゐるのだ。

「音羽さん、お前にもいろ／＼言いたいことはあるが、お前、おれをとめた位だから彼家の始末はつける心組だらうな。」

と、鬼竹は悪々しげに言つた、もとより間へ入つたのだから、此の位のことを言はれるのは覺悟の上であつたが、自分の始末さへもつかぬものが、如何して人のことに口を出せるものではない、然し、それは大恩のある御主人様だ……。

「音羽さん、どうしたんだ、え、おい、返事をしねえのか。」

「何ですか存じませんが、病人もありますことですから……。」

「何だ、何にも存じませんか？ 知らなきあ何故引込んでゐねえんだ、出しやばつ以上は、何とか始末をつけて貰はなくつちやならねえ。」

「御存じの通り、自分の家賃さへも滞はつてゐる私ですから、中々人様のことを始末することは出来ませんが、大恩のあるもとの御主人ではありますし……。」

「もとの主人だか何だか、そんなことは知らねえ、おれは、家賃もらへば文句はないんだ。」

「もとの御主人ではあり、可哀想にお嬢様が御困りの御様子ですから、餘り見かねまして……。」

「何だ、見かねたど？ へん、生意氣なことを言ふな、見かねたの、可哀想だのいふことは、お前なんその言ふことぢやねえや、生意氣言ふな。」

「でも……。」



「何を言やアがる、始末の出来ねえものなら何故口を出したのだ、初つからすつこんでゐる、だが、お前、自分の方の家賃はどうしてくれるんだ、おい、何時入れてくれるんだい。」

と、鬼竹は、怒鳴り立てる、音羽は往來の人を気にしながら、三の輪の裏通りを三河島の方へ、鬼竹に引ずられるやうに歩つて行つた。

## 六

音羽と鬼竹が、聲高に言ひ罵つてゐるのを、音羽の脊中にある子は、恐さうに見てゐたが、やがてわつと泣き出した。

「何だ、泣きあがつたな、弱え餓鬼だ、不景氣な面をしてゐやアがる、骨なし兒つてえのはあるが、肉なし兒つてえのは初めてだ、こう肉なし兒。」

と、鬼竹は子供を睨みつける、子供は尙更泣き立てる。

「何時まで泣きやがるんだ、騒々しいつたらありやしねえ、黙らねえか、これ黙らねえとコッソリだぞ。」

と、拳固を振りあげた、音羽は顔色を變へて、さつと飛びすさつて、

「竹さん、何をするんです、泣かうが泣くまいが勝手だよ、肉なし兒だつて骨なし兒だつて、お前さんの厄介にやなるまいし、大きなお世話だ。」

「何だ、厄介にならねえ、大きな御世話だと、大層もねえことを言ふな。」

「へん、大層も無いことを言つちや悪いかい。」

と、音羽はもう棄鉢氣味である。

「御大層なことぢやねえか、肉なし兒と言つたのが何が悪い、此の餓鬼か肉なし兒とても言はれて生きてるなあ誰のおかげだと思ふ、生意氣な。」

「何を、お前のお世話になりやすまいし、肉なし兒だつて……。」

と、音羽は口惜しげにぼろ／＼と涙をこぼした、背の兒はまた泣く。



「世話にならねえ、これ世話にならぬえとは何の言ひ草だ、三月も四月も無家賃で住まはしてをくのだぞ、それでも世話にならねえと云ふのか。」

「そりや家賃は……。」

「家賃がどうした、さあ、お前もそんな綺麗な口を聞くのなら、その家賃をたつた今入れて貰はふ、三月分の家賃を今入れて貰はふ、それが出来なきあ立ち退いて貰はふ……。」

「それや餘り……。」

「何が餘りだ、さあ、もう斯うなりやお前の方が先だ、さあ来い。」

と、音羽の袖をとつて引き立てながら、鳴りわめく鬼竹の聲は、さながら悪魔の叫びかとも思はれた。餘りの恐ろしさにか背中の兒は泣きやんでしまった、人通りの少ない場末の町とは言へ、何ごとが起つたのかと、兩側の家から飛び出して來て見る人、音羽は口惜しささ羞恥しさに燃えるやうな胸を押し沈めて、

「何も猛さん、そんなにしなくもいいでせう、家賃をいれたらいいのでせう。」

「何を言やアがるんだ、入れるくといつて三月も言ひ延ばしあがつたのぢや無えか、今日はもう勘辨ならねえや、さあ、お前の家へ行つて立ち退いて貰ふまでだ。」

「だから、家賃を入れますよ。」

「何を糞、夕方だの、明日の朝なんて言つても今日は勘辨出来ねえぞ、お前も世話にならねえと言つた口だつた、今金がよこせねえなら、これから一所に行つて店立するまでだ。」

「そんな無理な……。」

「何が無理だ、世話にならねえ、厄介はかけねえと言つたのぢやねえか、さ、今日はどんなにでもしてカタをつけねえぢや置かねえ。」

「カタをつけるたつて、こんな往來で……。」

「だからお前の家へ行かうと云ふのだ、さあ立てこの阿魔。」



と、胸倉をとつて引き立てる、忽ちぞろ／＼十七八人の人垣、音羽は羞恥しさに物も言へなかつた。

## 七

「さあ動ねえか、今日は何でもかんでも始末をつけて貰ふ、何を泣きあがるんだ、此の餓鬼め。」

と、鬼竹は頻りにわめく。

「叔父ちゃん、母ちゃんを打つちや厭だよ。」

と、子供は音羽の背中で泣く、音羽は口惜しい涙をぬぐつて、きつとなつて鬼竹を眺めた。

「お金はあげますよ、あげますから………そこを放して下さい。」

「さ、お前の家へ行かう、お前の家へ………」

と、尙も怒鳴りながら胸倉を取るのを、折から通りかゝつた二輛の俵、車夫は汗を拭ひながら、物珍らしそうに立ち停つた、俵の上の客は女二人、母娘と見えて顔立が似てゐる、若い方の女は丸鬘に結つた美人であつたが、少し面疲れが見える——母とも見える三十七八の婦人は、俵の上からちらと此の様子を眺めたが、

「あ、音羽さん。」

と、聲をかけた、然し、逆上きつてゐる音羽にも、鬼竹にもその聲は耳には入らなかつた。

「車夫さん、ちよつと待つて下さい。」

と言つて、年増の女は俵を降りた、つか／＼と人垣の間から入つて来て、二人の間を押しわけた。

「な、何をしやがるんだ。」

と、鬼竹はイキリ立つたが、見ると立派な服装の女なので、ちよつと照れたやう。



な顔をした。

「静かになさいまし、静かに言つても分ることですもの、一體どうしたと云ふのですか。」

「静かに言つちや分らねえから、大きな聲を出すのだ、お前さん一體誰ですえ。」

「わたしは此所を通りかゝつたものですが、どうせ中へ入る以上は、あなたの御得心の行くやうにしますよ。」

と、おだやかに、此方で言はふと思つてゐたことを、先方から言はれてさすがの鬼竹もちよつと目を丸くして、

「へエ、あつしの得心の行くやうにしてくれますか、そりやどうも有り難う御座いますね、どうか願ひますよ。」

「一體どうしたのですね。」

と、女は静かに音羽を顧みた、音羽はこのとき初めて顔をあげたが、びつくりし

て、

「あ、あなたは此の間の奥様……まあ、お恥かしい所を御目にかけてます。」

「本當にどうしたのですね音羽さん、仔細を御話しなさいまし。」

と、言ふのは、關屋のお舟であつた。

「仔細も御話し申しますが、あの、佐倉の奥様やお嬢様の居所が漸やう分つたので御座います。」

と、音羽はまづ何よりも先にそのことを言つた。

「それはいい按配で御座いますね、そしてやつぱり此邊に被在やるのですか。」

「はい、あの、此のすぐ裏町にお入來なのですが、本當にお困りなすつてゐます、どうか助けてあげて下さいまし、この鬼竹と云ふ男にそれはく、酷い目に逢つて……。」

と、音羽はほろ／＼と泣いた、鬼竹は面ふくらせて、



「おい、何を言ふのだ、そんなことより三月もたまつてゐる家賃はどうしてくれるのだ。」

さてはと察してお舟は、静かに鬼竹を顧みて、

「何もかも私が心得てますから、あなたもどうか、佐倉さんの御宅まで入来て下さい、さ、音羽さん、御案内して下さい、わたしが御伺ひしますから。」

と、お舟は落ちついて言つた。

### 三 個 の 魂

さし當つての難儀は、幸ひ通り合せたと言つて、音羽と一所に来てくれたお舟に救つては貰つたけれども、考へて見ればこれからが案じられる、長い年月人の情にばつかり絶つてゐる譯にも行かず、さりとて君代は弱い女、その細腕で一人で生き

るさへも此の世の中では難かしいのに、病氣の母親を抱えて、どうまゝ生活して行かれやう、それを思へば病んで寝てゐるおりうの心は寸断れるやうだつた。

「いい奥様になりましたわね。」

と、君代は母の心を紛らさうと思つてか、お舟と一所に来た半子の美しい話をはじめるのであつた。

「ああ、左様だねえ、半子さんもすつかり見ちがへるやうになつたね。」

と、さりげ無く言つたが、おりうの胸の内、血を吐くばかりであつた。

浦鹽へ行つた半子は、どうも身體が丈夫でないので、寒い内だけ内地で静養することになつて、十月中旬頃東京へ歸つて來たのだと云ふ、少し疲れてはゐたが、それさへもかへつて美しくしさを添えて見せた半子の姿を、おりうは羨ましく思つた。

「柳一さへ無事だつたら、お前だつてもねえ……。」

ああして奥様風に装つて、今日此の頃の小春日和、暖かい日には二人で物見遊山



にも出かけられやうものを、悲しい運命は、美しい君代を、こんな裏長屋に燻ぼらせるばかりか、病人の看護やら薬やら滋養やらのために、夜の目も合せぬ心づかひ、時には三度の御飯も満足には食べてゐないのを、おりうは思ひ出して堪らなく悲しくなつた。

「ああ、お前にばつかり苦勞をかける……。」  
と、目をつぶつて言ふ。

「不可ませんよ母様、そんなことを御心配なすつちや、身體によくありませんよ。」  
「心配しない譯にや行かないやね。」

「わたしが意氣地がないもんですから、母さんにも餘計な御心配をかけるのです。」  
と、君代は泣いた。

「そんなことは無いよ。」

「でも、母さんも追々よくお成りですし、わたしも是からは少しは餘計に働けます

から、もう安心ですわ。」

と、氣を變えて、つとめて晴れやかな顔を見せる君代の心持を思ふと、おりうは泣くにも泣かれないと思つた。

「さうだねえ、わたしも快なつたら二人で一生懸命働さませうよ。」

「ええ、早く左様なりたいわね。」

「けれども、誰のために働くんだかねえ、お互ひに希望も、楽しみも無いんだから、厭になつちまふわね。」

と、おりうは寂しく笑つた。

君代は黙つて袖を噛んだ、その様子を見ると、おりうはまた悲しくなつて來たが、さりげ無く、

「お前、しばらくお湯に行かないやうだね。」

「ええ、でも……暑いうちと異つてそれほど苦にも成りませんわ。」



「だつて餘り入らないと悪いよ、今夜はわたしも大變具合がいいやうだから、行つて來たら如何だね。」

「左様ですね、でも、わたし、餘り入りたくはありませんもの。」

「餘り入らないと毒だよ、母さんの氣分のいいときに行つて來て呉れば、お互に心配が無いぢやないかね。」

「それも左様ですね、ぢや、ちよつと行つて來ませうか。」

「左様おしよ。」

と、言つて、おりうは夜具に顔を埋めて終つたが、すぐに思ひ直したやうに君代の方を見た。

「ぢや、行つて參ります。」

と、立ちかけたが、君代はまた座つた。

二

「如何したの?。」

と、不審さうに聞いた。

「でも、あたし何だか行きたくありませんから、今夜はよしますよ、今晚でなくつてもいいのですもの。」

「行きたくないつて言ふのを無理に勧めるんぢや無いけれども、今夜は、母さん馬鹿に氣分がいいから、安心して留守をしておられるから左様いつて見たのによ。」

と、おりうは言つて横を向いた、その眼は涙が一ばいであつた。

「母さんの御氣分の御よろしいときなら、わたしも安心ですけれども……。」  
「だから行つてをいでと言ふのよ。」



と、おりうは目で微笑つて、胸で泣いた、然し君代は氣がつかなくかつた。

「ぢや、行つて來ませうかね。」

と、石鹼やら手拭やら、そこへ揃へたが急には立ちそも無かつた、どうも氣が進まなかつた。

「どうしたの、頭痛でもするの。」

と、言ふ母親に心配させまいと、君代は威勢よく立ち上つて、

「いゝえ、何ともありませんよ、ぢや行つて參ります。」

近所の女房に細々と母の身の上をたのんで、それから出て行く君代の足音が、路次の表へ消えてしまふと、おりうはそつと床の上に起き直した。

「君や、勘忍しとくれよ。」

と、手を合せる。

「生じ生き永へてあの娘の世話になるより、いつそ死んで……そしたらあの娘も

生活が樂でもあり、何所かい所があつたらお嫁にも行くだらう、それがあの娘の幸福なんだもの。」

と、われ知らず獨り話して、おりうはよゝと泣くのであつた。

斯うして自分と云ふものがあるばかりに、可哀想に君代がひとりで苦勞する、一日生き永らへてゐればゐるだけ、それだけ君代の苦勞は殖えて行く、獨身でゐると言つてもまだ若いのだもの、それぢや可哀想だ、と云つた所でこんな厄介者がついてゐたのぢや、お嫁にだつて貰ひ手もないのだから、老先の短かい、生くる甲斐のない自分は、いつそのこと病氣で死んでしまへばいいと思つたのに、とう／＼快なつて來たことさへも、今は中々物思ひの種であつた。

死なう、死なう、死ねば此の世の苦勞を逃れるばかりではない、君代だつて厄介者がなくなつて、それからどんな出世でも出来るのだもの、あの娘が自分を厄介者だと思つてゐないのは分つてゐるけれども、何時まで世話をかけるのはいつそ可哀想



でならない。

『さう決心したら、あの娘の歸らないうちに……』

と、立ち上つて、よろめく足を踏みしめながら、おりうは硯箱を出した、紙を出した。筆をとつた、その紙の上に落つる涙の露しぐれ、ほろ／＼泣けば虫も啼く、さうして寂しいと云ふ秋の、吹く風さへも冷たかつた。

『ああ……』

と、一字書いては溜息をつき、一行かいては涙を流し、書いてしまふと、われとわが文字を讀んで泣いた。

『斯うしちやゐられない、あの娘の歸らないうちに……』

と、巻紙をくる／＼とまいて、机の上をき、着物を着換えて、二足三足、静かに戸外へ出て行つたが、折しも宵闇、近所の人も氣が付かなかつた。風の音、虫の聲、秋は寂しい。

三

後から追ひ立てられるやうな心持になつて、大急ぎで君代は風呂から歸つて來た、隣家の女房さんに聲をかけてから、

『母さん、唯今。』

と、言ひながら、がら／＼と格子戸をあけた。

中は静寂としてゐて物音もしない、眠つてゐるのかしらと、座敷へ上つて見ると、母の床は藻抜のから！

『あッ、母さん、母さん。』

と、呼んだ、若しやと思つて便所を探したが、そこにも母の姿は見出せなかつた。

『母さん、母さん。』



と、泣きながら、途方にくれて座敷中をぐるぐると歩つてゐた。

「君ちゃん、如何かしましたか。」

と、隣家の女房が顔を出した。

「あ、女房さん、お母さんがゐないのですよ、お母さんが……。」

「えッ、お母さんが。」

と、隣家の女房も青くなつて入つて来た。

君代は狂氣のようになつて泣き騒いだ、隣家の女房さんも、口では仔細らしいことを言つてゐるが、何とも手の出しやうはなかつた、その内に机の上にある手紙を見た。

「あッ、遺書！」

と、君代は今更のやう愕然とした。

半分讀みかけると、顔色を変えて飛び出した。

「君ちゃんく。」

と、隣家の女房は追ひかける。

「女房さん、あとをお頼み申します、わたしは母さんを探さなくつちや……。」

と、言つたかと思ふと、あとは闇の夜、君代は宙を飛ぶやうに千住の大橋の方へ歩つて行つた。

\* \* \* \* \*

風も冴えて凝るばかり、月も哀れに影瘦せた秋の夜、人氣途絶えた荒川岸に悄然と佇む女の影。

「ああ、どうしても母さんは見つからない、これほど探しても見つからないのだから、どうせもう何所かの川へでも身を投げて御終ひなすつたに違ひない、頼みに……ふ母さんに別れてしまつては、わたしも生きてる甲斐はないのだから、わたしもい



つそ死んでしまはふ……。」

と、さめくと泣く袖の露、袂を吹く川風は冷たい、びしやりくと岸を打つ波の音の寂しさ、泣くやうな咽せぶやうな訴へるやうな川瀬は、わが身も魂も遠い黄泉へ引きすり込んで行くかと思はれるのであつた。

あたりに落ち散る小石を拾つて袂に入れては泣き、泣いては拾つてゐたが、やがて思ひ決して、暗く淀んだ水の面を見入つて、身を翻へして袂の風、あはや飛び込もうとするのを、背後から、

「ま、お待ちなさい。」

と、引きとめた者があつた、君代は身をもがいて、

「どうぞ、とめないで下さいまし、留めないで……。」

「留めるなど仰有つても、人が投身しやうとなさるのを見捨て行くことが出来ましか、ま、お待ちなさい。」

と、云ふのは女の聲、君代はハツとして振りかへつて見た、その顔と顔、雲の間を洩れた月光にすかして見て、

「お、母さん。」

「君……。」

と、ばかり、二人はそこへ座つてしまつた。

波の音、風の響、二つの魂がすゝり泣く聲のやうに聞かれた。

四

投身をしやうと思つて家を出たおりうが、投身しやうと思つた女を助けたのも不思議な話だが、その女が君代であつたのも、思へば怪しい縁のめぐり合せであつた。

「母さん、ひどいわく、死ぬなんて、死ぬなんて、餘りひどいわ。」



と、君代は母親の袖をしつかりと握つて言ふ。

「君ちゃん、勘忍しとくれよ、母さんは死んだ方がいいのだもの。」

「そんな事はないわ、母さんに死なれてしまつて、あたし、如何して何を樂しみに生きてられませう、死ぬなら何故、一所に死ねとは仰有つて下さらないんです。」

「お前は若いんだもの、これから、いくらでも出世が出来る身體だもの。」

「どんな出世をしたからつて、母さんが被在やらなくつちや、ちつとも嬉しいことはありやしませんわ、わたしや出世なんかしたくはないわ、兄さまがあんな事に御成りなすつたとき、いつそ死んでお供がしたいと思つたのを、斯うして生き永へてゐたのも、母さんと云ふ方があればこそちやありませんか、その母さんに先立たれて、あたし、如何して生きてられませう。」

と、君代は身を慄はして泣くのである。

「君や、勘忍しとくれよ、わたしが悪いんだから……。」

「ちつとも母さんが悪いんぢやありません、みんなあたしが意氣地がないから、こんなことになつたのですもの、死亡つた兄様にも申譯がない……。」

「……ああ……柳一さへゐたらばねえ……。」

「兄さまの所へ行きますせう、兄様のところへ……兄さまの被在やらない世の中に生きてゐたつて……。」

「君や。」

と、おりうはきつとなつて、

「老先の長いお前を殺すのは可哀想だけれども、左様いふつもりなら、母さんと一所に……。」

と、あとは言ひ得ず、涙と共に呑み込んでしまふ。

「え、一所に行きますよ、母さんのために生きてゐた私ですもの、母さんと御一所ならば火の中でも水の中でも……。」



「一緒に死んでくれますか、一所に……。」

「え。」

と、首肯く顔の微笑、おりうはたまらなくなつて、わつと泣いた。

「さ、それちや濟まないが一所に行つておくれよ、人に見つからないうちにね。」

「え、兄様の被在やる黄泉へね、兄様が待つてらつしやるわ、よく母さんのお供をして来たつて褒めて下さるわ。」

「あ、君や、そんな悲しいことを言はないどくれ。」

「母さん。」

「え？」

「此の水が續いてるわね、兄様の御死亡りなすつた海へね。」

と、君代はさめくと泣いた。

流れくつて、いつかは同じ海へ入るべき水が、相離れて死ぬるこの二つの魂を、

やがては柳一の魂と結び合せて、三つの魂が一緒になる時が無いとも言へないのだと、君代は悲しい運命に泣きながらも、微かな喜びを覺えた。

「君や、死んでしまつてからも離れないやうに……。」

「え、何所までも一緒にね。」

と、二人は扱帯を解いてお互の身體を結び合せて、われとわが生命を捨つる緋縮緬、若い君代が可哀想だとおりうは思つた、年老つた母様にお氣の毒だと君代は思つた。

寂しい目を、見合せた二人の顔に血の氣はなかつた。

## 五

二つの身體が岸を離れやうとしたときに、突如として人の影、二人を結び合せて帯を捉へた。



「お待ちなさい。」

と、やさしいうちに犯すべからざる凜とした若い男の聲。

「どうぞお放しなすつて……。」

「いや放しません。」

と、力任せに後へ引き戻して、

「とめたからにや、きつと死なくもいいやうに話をつけませう、お金で済むことならお金も出してあげませう、もしまた他に御事情がありますなら、随分お力になつてあげませう、ま、一應事情を御話しなさい。」

「は、御親切様に有り難う御座いますが……。」

と、おりうはほろ／＼と泣いて、

「死なねばならぬ事情がありますのです、失禮な話ですが、お金や、人様の御世話になつて、それで済む事情ではないのです。」

と、云ふ聲をきいて、顔をすかして見て愕然！

「お、母さんぢやありませんか、あ、母さんだ母さんだ、あ、母さんだ。」

と、若い紳士は地上へ座つておりうの袖に取り縋つた、星の影、月の光、三人は顔を見合せた。

「お、お前は……。」

「柳一ですよ、柳一ですよ。」

「柳一！ 柳一！ 柳一がどうして此處へ……どうして無事で……。」

「え、柳一は無事でしたよ、不思議に生命が助かつてねえ、どんなに母さんたちを探したか知れませんが、あ、でもよかつた、本當によかつた、本當に……。」

「柳一々々、お前が柳一……。」

と、おりうは尙吐やくやうに言てる。

「幽霊でも何でもありませんよ、正真正銘の柳一ですよ、不思議に命が助かつた



つて言つてるぢやありませんか。』

と、云ふ聲・顔、今はもう疑ふ可くもなかつた、どうして生きてゐたかを考へる餘裕もない。

「柳一、あ、本當に柳一だ、どんなに心配してゐたらう、よく歸つてくれました、よく、本當によく。』

と、わが子の外套の袖にとりすがつて、瀧のやうな涙を流した。

「君や、兄さんだよ、本當の兄さんだよ、お前の逢ひたがつてゐた兄さんだよ、柳一々々、本當にお君は苦勞しましたよ、お君は……お君は……。』

と、しまひには、何が何やら分らないことを言つて泣くのであつた。

「母さん、まあ静かに……そんなに一度に何もかも言つちや分りませんよ。』

「静かになんかしてられるもんかね、死んだと思つた悴に逢つたのだもの、こんな嬉しい、思ひがけないことはありやしない、さ、君や、恥かしかつてゐないで此方

へおいで……。』

と、君代の手をとつて引きよせると、君代は轉ぶやうに柳一の袖にすがつた。

「兄様……。』

「とんだ心配をかけた……。』

「いゝえ、兄様こそ飛んだ御災難で……。』

と、泣くばかり、聲はすぐに途切れてしまふのである。

「いろ／＼聞きもし、話もしたいが此所ちや何だから、ともかくも私と一所に……。』

と、柳一は塵打ち拂つて立ち上つた。

死んで一所になりたいと希つた三つの魂は、斯うして生きて一所に結び合はされたのであつた、母と娘は、右と左から柳一の袖に寄り添うて立つた。



## 二人の女房

佐倉柳一と云ふ新しい標札を打ち仰いで、ちよこくと小走の八つばかりの男の子が、門を入つて勝手口の方へ廻つた、二子縞の垢のついた綿入、小倉の帯をキチンと締めてはゐるが、何所やら寒さうに肩をすぼめて、

「御免下さい。」

と、云ふ、中から柔しく、

「あいよ、酒屋の小僧さんかい。」

と、障子をあげた三十ばかりの女、おせきといつてちよつと仇つばい女中である。

見ると男の子は、

「お母さん。」

と、呼びながら袂にすがりつく。

「あれお前、清之助ぢや無いか、まあ、まあ、よくまあ。」

と、涙ばかりが先に立つのも、何とやら仔細ありげな、奥を憚る忍び音に泣きながら清之助を抱いて、

「よく此家が知れたねえ、今も今、お前のことを思ひ出して泣いてゐた所だよ、本當によく、よく来てくれたね。」

「馬道の小母さんに聞いて来たの。」

「さうかい、よくねえ、そりや左様とお父さんは相變らず壯健かい、赤坊ぢやんは如何したね、え、泣いてちや分らない、話しておくれな、え、清之助や。」

「お父さんも、赤ぢやんも壯健だけれども、あのね、いろんなことがあるの。」

「いろんなことつて何？」



「お父さんがね、とう／＼あの阿魔ッちよをつれて来たの。」  
「阿魔ッちよつて？」

「ほら、あの女さ、おりんツてえ女さ。」

「ほ／＼、何故阿魔ッちよなんて言ふの？」

「だつて阿魔ッちよに違えねえんだもの、構やアしないや。」

と、言へば、おせきはほつと溜息をついて清之助の脊中を撫でながら、

「左様かねえ、さぞ赤ちやんを慘くしたらうね。」

「でも、仕方が無いからね、他の女房さんのお乳を買つたり、お米を摺つて吞せたりしたけれども、あたいは穀潰しだからつてね、奉公にやられたの。」

「まあ、お前をかい、まあ。」

と、堪らずほろ／＼と泣く。

「でもねえ、御主人や女中さんが可愛がつてくれるから、家にて御飯を焚いたり

阿魔ッちよに打たれるより餘程いい。」

「まあ、お前に御飯を焚かせたのかねえ、そしてその繼母さんは何をしてゐるの。」

「阿魔ッちよはね、いつでも朝寝をして、お父さんが稼いで来るお金でみんなお酒を飲んでしまふの。」

「まあ、それでもお父さんは目がさめないのかねえ、そしてお前、御奉公に出てからお父さんに逢つたかい。」

「ああ、此の間ね、向島へお使に行つたらね、お父さんがね、赤兒ちやんを抱いて通つたの。」

「赤兒ちやんを抱いてかい、まあ。」

「何所に行くつて聞くからね、お使ひに行くんだつて言つたら、よく御主人の言ふことを聞いて一生懸命御奉公して、立派な商人になれつて、お父さんのやうな者になつては不可ないつて……。」



「まあ、左様言つたのかい、お父さんが左様言つたの。」

「それでね、あの阿魔ッちよは他の人と逃げてしまつたから、留守番が無くつて、仕事にも出られないし、赤兒ちゃんも泣くし、こんな困つたことはない、みんなお母さんの罰が當つたんだつて。」

「まあ。」

と、おせきは涙をぬぐつて、今更のやうにわが子の見すばらしい姿を見た。

## 二

その時、奥でおせきを呼ぶ聲がしたけれども、聞きつけられない風で、

「そうかねえ、繼母さんが逃げたかね、それはまあお父さんも御困りだらうけれども、お母さんの罰だなんて情ない、お母さんは何も、お父さんが悪くなれとは思つちやらない、どうかしてお父さんに目を覺して貰ひたいばかりに、斯うして御奉

公してゐるんだが、貧乏しても親子四人、水入らずに消光したいと、そればかりを楽しみにしてゐるのにねえ。」

と、鼻打ちかんで、

「そりや左様と、お父さんは今何處にゐるか聞かなかつたかい。」

「聞かうと思ふうちに、お父さんはさつさと橋の方へ行つちまつたんだもの。」

「さうかねえ、本當に何したと云ふのだらうねえ、よく訪ねて来てくれたのに、悲しいことばかり聞いて、お母さんは胸が……。」

と、言つた時に、次の室で衣すれの音がしたので、はつと清之助を離して、

「ゆつくり話を聞きたいけれども、御用が多いから左様してもゐられない、お前も遅くなると御主人に悪いから、今日はお歸り。」

「あゝ、あたい、お使先なのだから。」

「それなら尙更、そしてお前の御奉公してゐる家は何處だつね。」